
gradge

クロイ名無

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

graduate

【Nコード】

N7487Z

【作者名】

クロイ名無

【あらすじ】

主人公の深峰快^{ふかみねかい}は特に変わったところのない高校生
春、高校2年生になった日、友達の西又良^{にしまたりょう}や幼馴染の天野桜^{あまのさくら}などと話していると文通の話になり、快も文通を始めることに初めて早々『グラッジ』と名乗る人物と文通をすることにしかし、数日後に届いたグラッジからの奇妙なメールで快の人生は大きく変わる

恋愛、ホラー、推理(？)、いろいろ混ざった(混ざってしまった)

新ジャンル（？）小説

小説&まんが投稿屋にて連載済み

始まりのメール序章

To グラッジ From X

春は出会いの季節だと友達から聞いたことがある。確かに、入学式やら進級などでの出会いは必然と増えるだろう。卒業式を言えば別れの季節だが……まあ、そこは気にしないでおう。とりあえず、春は出会いの季節だ。君と会えたのも何かの縁だと思って、仲良くしていきたいと思う。よろしく

俺はパソコンに簡単に文を打ち、送信相手へのメールアドレスが間違っていないかを確認して送信ボタンを押した。

「ふ」。流石に初めてのことってのは緊張するな。」

俺は椅子の背もたれに体重を預けながら、一息ついた。そのときにはもう、画面に『送信完了』と表示されており、引き返せないところへ来ているのだと実感できた。

「しかし、いくらなんでも俺までマジでやるとは思わなかったな。」

俺は自分に呆れながら昨日のことを思い出した。昨日は始業式で、数週間ぶりにクラスの人と会った。春休みということで、会わない期間は短いので、誰もそこまで変わっていなかった。メールで話したりしていたので、直接は会っていなくても自然と話せる。その時に出てきた話題が【文通】。文通と聞いたときは「これまた古風なことを」と思ったが、実際は少し違って、ただ単に専用のメールアドレスを作り、ネットに晒す。そして文通をして欲しいという内容を書き、そのメール宛に来た最初のメールの人と文通みたいにメールをし合おうというのだ。もちろん、晒すサイトはちゃんと友人のサイトで、注意として送るとどうなるかは書いてあった。俺は反対したが、皆がその話にのったこともあって、その日からスタートしたのだ。そして、その日の夜、さっそく俺の元にメールがやってきた。名前は『グラッジ』と書かれていて名前からは男か女かは分からない。内容は簡単なもので、挨拶だけで終わっていた。

「…………さて、そろそろ学校へ行く用意でもしとくか。」

俺は電源を落とし、立ち上がった。俺は狭い部屋の端にあるクロ
ーゼットやタンスから服を取り出し、着替えだした。脱いだ服は綺
麗にたたみ、タンスの中へ入れると、1階へ降りていった。

「あ、快君。おはようございます。」

1階へ降りると、幼馴染の天野 桜が椅子に座ってご飯を食べて
いた。昔から勝手に入って（合鍵渡したのは俺だけど）勝手に食べ
ているので、問題はない。長い黒色の髪にはウェーブがかかってい
て、その髪は腰より少し上まで伸びていた。顔立ちはスツキリして
いて、美少女と言えるほどの容姿。おまけに背が少し低いので、学
校では人気者（マスコットの意味を多く含む）の幼馴染だ。ただも
う一つ、この幼馴染の左手がないことも、有名な理由だ。他にも背
中に、大きな火傷の跡があるが……まあ、知ってるのは俺ぐらいだ。
「快君は朝、どうします？」

「え？あ……どうしようか……。」

桜のことに気を取られていて返事が変になってしまったが、なん
とか気づかれなかったと思う。」

しかし、朝か……。基本的に俺はあまり食べ物を食べない。とい
うより、食べられない。特に調理したものが駄目だったりする。な
ぜ駄目なのか。それはよく分からないけど、なぜだか体が拒否する。
空腹が限界近くまでくれば食べられるが、基本的に食べようとすれ
ば吐いてしまう。無理をすればなんとかなるが、両親が出張中なの
で、無理に食べる必要はあまりない。俺が食べないと両親が心配す
るから、その時のために体力は温存しておこう。……まあ、ただ食
べたくない言い訳だけど。

「いや、いいや。」

「そうですか。」

桜はそう言うと、片手で器用にご飯を食べ、立ち上がった。その
まま歩いていき、桜は食器を流しに置き、日曜大工が趣味の父が、
桜のために付けた、食器を固定するものに固定して、食器を洗った

「じゃあ、いきましようか。」

朝なうえに桜は小食なので、さっさと食器を洗うと、カバンを持ち一緒に玄関を出た。昔から小・中・高と同じ学校へ通っているの、一緒に登校するのが普通になっている。中学の頃は冷やかされたりしたが、俺も桜……は赤くなって恥ずかしがっていたが、俺のほうは特に気にならなかったもので、いつも一緒に登校していた。桜自信も、恥ずかしがっても、毎朝俺の家まで来ていたので、本当に単純に恥ずかしかったただけなのだろう。

「そう言えば快君。昨日、西又君と話していた文通のことなんですけど、誰かから返事はあつたんですか？」

『西又君』とは、例の文通の提案者であり、本名は『西又 良』。楽しいこと一番を信念とさえしている奴である。現に、付き合いはそこまで長いほうではないが、今までに法律違反をギリギリで避けている感じた。……つまり、解釈の仕方によっては法律違反をしているのだ。本人は、警察に捕まったりしない限り無罪だと主張しているが、実際にはギリギリである。

「ああ。一応な。昨日の夜に来たんだ。」

「へえ。こういつてはなんなんですが、変な人ですね。」

「変？　どういうこと？」

「あちらも専用のメールアドレスかもしれませんが、それでも見ず知らずの人にアドレスを教えて連絡の仕合をしようとしてきたからですよ。」

確かにそう言われれば変な人だ。とりあえず、俺だったらメールは送らない。相当暇をしていたら別だが、それなら見ず知らずの人と連絡を取り合うより、友達にメールをした方が楽だし、楽しい。

「それで結局のところ、その文通は何をするんですか？」

「何って……普通に世間話をするだけだけど？」

「そうなんですか？　私、文通をやったことがなくて、どんなことをするのか気になっていたんですよ。」

実は、桜は携帯すら持っていない。今の時代、なくては不便とま

ではないか、持っていないのは珍しいが、本人が必要ないと言っているので買っていないらしい。

「特に特別なことをする気はないな。良なんかは相手が女性だったら会いたいて言ってたけど」

「快君も、もし近所に住んでいたら、一緒に出かけたりしないんですか？」

「んゝ……どうだろう。」

「そうですね。……ところで、話は変わりますが、数日後にこの町の神社でお祭りがあるのは知ってますか？」

「祭り？」

「祭りなんてあったらどうか？春祭り？……いや、ないだろ」

「なんでも、ある国の首相さんの奥さんの生まれがこの町のように、その首相さんと奥さんが数日前からこの町に来てるらしいんです。」

「それで、出国前にお祭りをするらしいですよ。」

「へえゝ。……それで、桜はその祭りに行くのか？」

「すみません。私はその日は用があるので、いけないんです」

「そうか。なら俺も家にいるか。良と男2人で回るなんて悲しいだけだからな」

「その後も、なんでもない雑談が続き、登校した。俺と桜は一緒にクラスなので、教室へ行き、席へ着いた。

「よう。誰かからメールは来たか？一応、お前以外に聞いたが、誰も来てないそうだ。」

席に着くと、さっきの話に出てきた西又 良が現れた。長身で、ボサボサな髪。元々の顔はいいはずなのに、性格ゆえにヘラヘラした顔になり、一部の女子に『残念なイケメン』と呼ばれている男。楽しいこと一番という性格を除けば、明るいし、義理堅いし、頭はいいしで、むしろその性格さえ除けばモテモテだろうと想像できる。昔本人に言ってみたが、「無理無理。この性格は直らないって。それに、俺はそこまでイケメンじゃないって。」と返された。

「俺の所には昨日の夜メールが来たぞ。」

「何！？マジか！どんな奴だ！」

俺が言つと、良は顔を思いっきり近づけてそう尋ねてきた。……
どうでもいいが、顔が近い。

「ああ。グラッジって名前の人から」

「グラッジ？……名前からして男っぽいな。」

「でも、偽名だろ？俺だつてXだし」

ついでに言つと、元々は快という名前だから『カイ』にでもしようかと思つたが、『かい』で変換してみると、ギリシャ文字で『X』があつたので、そっちにした。

「まあ、そうだけど、女性で『グラッジ』なんて付ける奴いるか？好きな歌手とかそういうのなら分かるけど、そんな奴は聞いたことないしな。」

楽しいこと一番ということで、女性方面の雑誌などすら読む良が言つなら、ほとんど間違いはないだろう。

「桜ちゃんも聞いたことないだろ？」

「……そうですね。聞いたことがないですね……。」

桜は少し考えると、そう答えた。そう答えたところでチャイムが鳴つてしまい、そこで会話は終了し、良も席へ戻つた。担任が何か言っているが、聞き流す。さして重要なことではないだろう。朝の担任の報告を真面目に聞く奴など、桜や良以外にはいないだろうしな。

むしろ、重要なのはこの後だ。この学校、特に進学校でもないどころか、授業自体、真面目にやる教師がいないのに、始業式の次の日から通常授業がある。しかも、今日は金曜日で、明日からまた休みなのに授業があるなど、無駄過ぎる気がする。面倒なこと極まりない。

何気ない日常

「ふー。流石に久しぶりの授業はキツイな」

授業が終わると伸びをしながらそう言う。特に誰かに言ったわけではないが、隣の席が桜なので、何かしらの返事はしてくれるだろう。

「そうですね。」

言葉ではそう言っているが、桜は笑ってそう言っし、本人にはほとんど疲れが見られない。まあ、桜の場合は体型を維持するための運動以外はほとんどしないし、そこまで疲れるようなことをしている記憶がないので、『疲れている』という状態自体を見たことがほとんどないんだが。

「というか、なんでそんなに平気そうなんだ？」

「春休みにも勉強はしてましたので。」

「へー。……とは言っても、春休みなんて短い休みに、宿題以外をやる物好きなんて、桜以外にいないだろ？」

「いいえ、そんなことはないですよ？春休みにたまに図書室へ行っていましたけど、大抵、西又君がいましたから。」

「あー……アイツも例外だな。アイツはお前みたいに勉強したくてしてるわけじゃないから。」

良の場合、昔から「とりあえず勉強ができれば、犯罪以外なら何やってもいい」と親から言われ続けていたらしく、結果として、学年主席を楽々維持し続ける頭脳の持ち主となった。桜も努力しているのだが、今まで一度も良に勝てたことがない。とはいっても、良とはいつもギリギリ負けてるレベルだし、3位の人との差が大きい。中の中の成績の俺からしたら十分過ぎる

「それでも努力を続けられるのは凄いことだと思いますよ？」

まあ、確かにそうだ。俺だったら、そんなことぐらいじゃあ動かない。そりゃあ、学年主席を取るたびに100万円やるとか言われ

れば別だが、基本、放任主義な両親なので（というより、出張ばかりの両親との記憶より桜との記憶の方が多い気がする）、良のような条件では動く気にはならない。

「まあ、とにかく、俺には休日の勉強は無理ってことだ。」

桜は「そうですか」と言う、「それでは帰りましょうか」と言い、立ち上がったので、俺も立ち上がった。

俺の家と桜の家は方角は同じだが、特別近いわけでもなければ、遠いわけでもない。まあ、歩いて5分ほどだろうが、住宅地なので当然だ。俺と桜は幼馴染だと思っし、周りもそう言っている。別に問題ないのだが、特に家が隣同士で子供の頃から兄妹のように育った、なんてことはない。出会ったのが小学校入学前と言う、早い時期だったので、自然と一緒にいる時間が多かっただけだ。その頃から下校は一緒にしているので、今日も一緒だ。登校の方は小学校の頃からだったはずだけど、なぜかは覚えてない。別にどうでもいいだろう。

俺は家に帰ると、さっそくパソコンを起動した。相手がどの誰だかは分からないけど、もしメールが着ているなら早めに返した方がいいだろうと思っただからだ。……まあ、そんなマメなことをやるのも最初の内だけだろう。そう思いメールを確認してみると、メールが1つ来ていた。

To X From グラッジ

確かに、春は出会いの季節だと思う。……でも、出会いがいいものかは分からない。出会わなければよかった出会いもある。重要なのは、出会って、どう発展させるかだと思う。だから自分は、出会いを探す前に、今までのことを振り返ってみたい。

……内容はとりあえず理解できるが、まさかそんな返事が来るとは思っていなかった。他人がどういう考えを持とうが、興味はないけれど『春は出会いの季節』なんて言ったのは良で、ただ単純にメールを書くときに思い出したから書いたただけだ。俺自身は、このあとに簡単な自己紹介でもするのかと思っただけ、相手はそうは思っ

てないみたいだ。……さて、どう返せばいいのだろうか？急に話題を変更させるわけにもいかないし、かといって俺は春にそこまで関心があるわけではない。過去を振り返る気もないし、これから先の未来……例えば明日にでも、可愛い転校生が来る展開などを想像しても仕方ないと思う。第一、転校生が来たとして、俺の人生にはほとんど関わらないと思う。桜と一緒に「転校生なんて珍しいな」とか言ったりして、少し話題にするだけで、すぐにどうでもよくなると思う。だから、自然と返信する内容なんて、適当に共感した振りをするか、反対の意見を書くしかないと思う。

俺は心の中で『春は出会いの季節』なんてことを言った良を恨みながら、メールの新規作成ボタンを押して、文章を書き始めた。

To グラッジ From X

確かに、出会わなければよかったと思う出会いもあったけれど、自分はそこまで悪い出会いがなかったせいかな、やはり出会いが欲しいと思う。悪い出会いも良い出会いも、出会いがなければ起こらないことだから、それが良い出会いであることを信じて、出会いを待ちたい

パソコンにそう入力し終え、送信ボタンを押した。一応、俺の本心を書いたけれど、果たしてこれでよかったのかは分からない。別に気軽にメールする感じでいいのだろうけど、なにぶん、相手がどんな人か分からないので、どう書けばいいのかが分からない。良や桜相手の方がどれだけ楽かがよく分かる。さっきも考えたことと同じだけれど、俺は別に本気で出会いが欲しいわけじゃない。今のまま、適当に高校生活をして、もしかしたら良や桜とは違う大学かもしれないけど、とりあえず大学に行って、就職。飛び切り良い人じゃなくても、悪くない人と結婚して、子供を作る。そしてゆっくり老衰。そんな感じの人生でいいと思ってる。むしろその方がいい。死ぬまで特に大きな変化のない生活でいいと思っている。悔やむ過去も無く、未来に希望を持つでもない、平凡な人生。初めのメールであんなことを書かなければ、おそらく、さっきのメールでも、

出会いなんて興味ない』と書いたと思う。俺は時計を確認し、とりあえずの寝る時間を決め、ゲームを始めた。

始まりのメール警告

起きると昼前だった。まだ春休みのダラダラした生活が抜けないのか、目覚ましをセットしていなかったからなのか、昨日寝たのはまだ早い時間だったのに、昼まで寝てしまった。別に用事などはないし、親もいないのでいつまで寝ていても問題はないのだけど……流石に昼までというのはどうかと思う。

俺はベットから出てカーテンを開けた。外は当然のように明るくて、結構暖かい。再びカーテンを閉め、さっさと着替えて、カーテンをもう一度開け、下に降りる。昨日は朝、昼はもちもん、夜さえも食べなかったので、今なら少しは食べられると思う。

1階に降りると、当然のように誰もいない。両親が出張に出始めたころは違和感があったけど、流石に慣れている。むしろ、もしかしたら、両親が帰ってきて、両親がいる方が違和感を感じるかもしれない。

俺は冷蔵庫を開け、中を確認してみた。パツと見た感じ、すぐに食べられるのがイチゴ、ヨーグルト、チーズ、ウインナー。生でないなら野菜。調理が必要なのが魚と肉。ご飯は炊いておいた記憶はない……というか、使い方が分からないので、あるわけがない。冷蔵庫を閉めて、戸棚を開けると、ツナの缶詰が1つ。

……どうしよう。そこまで食べる気はしないとはいえ、流石に駄目な気がする。空腹自体は問題ないのだが、ヨーグルトやチーズでは、『食べた気分』というのが満たされない。俺にとって重要なのは、『食べた』という満足感だからな。結局は『もう食べられない』という状態までは食べれないのだから、食べたという気分だけは持ちたい。……と、なれば一番いいのは魚か肉。……だが、俺に調理はできない。桜を呼ぶという手もあるけど、それは避けたい。こんなことで呼ぶのはどうかと思うし、向こうも迷惑だろう。

仕方ないのでツナの缶詰を取り出し、チーズとウインナーも一緒

に食べた。食べ終わると缶詰などの後始末をして、財布を持って外へ出た。夜はいらないにしても、明日の朝はたぶん、腹が減っているだろうから何か買っておかないとまずい。選択としては弁当かパン。さつき肉か魚を食べたいと思っていたためか、異様に何か食べたい。まあ、何かと言えば肉を食べたいんだけど。

歩いて10分ほどの所にあるコンビニに入ると、意外な人物を見つけた。

「よお、良じゃないか。何してるんだ？」

雑誌売り場で立ち読みをしていた良に近づきながら、声をかけた。「おお、快か。お前こそどうしたんだ？お前がコンビニに来るなんて珍しいじゃないか。」

確かにそうだ。普段から料理は親か桜がやる（ほとんどの場合が桜だけ）ため、出かけること自体が珍しい。例え出かけることがあったとしても、それは桜と一緒にというのが多い。主な理由……というか、一緒に出かける理由の100%が荷物持ちだけだ。まあ、その食材の5割ほどは俺の家の冷蔵庫に入るので、文句は言わないけど。

「俺は明日の朝……いや、昼かもしれないし、夜かもしれないけど、とりあえず明日の飯を買いに来た。」

「ん？お前の両親が出張中というのは聞いたが、桜ちゃんが作ってくれるんじゃないのか？」

確かに、あの甲斐甲斐しい幼馴染は、春休みの間も毎日飯を用意してくれた。朝来て、いつでも暖めれば食べられる物を作り、冷蔵庫に入れていた。だから、春休み中、俺は外にでなくて済んでいたのだ。……まあ、結果としてそれはいいのか悪いのかは分からないけどな。

「今日は来なかったんだよ。起きたのもついさつきで、食べたものもツナ缶1つにヨーグルトとチーズだけ。明日はそんなことがないようにと思ってな。」

「というか、1日をそれだけで生きていけるのか？」

良が不思議そうに見てくるが、俺は平然と頷く。確かに、常人ならちよつと無理だろうけど、俺にとつて常人の『腹が減った』というレベルはまだまだ大丈夫なレベルなのだ。ろくに食べる物がない生活をしている人にとつての『餓死する』より少し前のレベル辺りじゃないと、俺にとつての腹が減ったにはならないのだ。そりゃあ、昔は常人の『腹が減った』で何度も食べようとしていたけど、そのたびに吐くので、今ではもうその感覚すらなくなった。食べられる状態になつても『あ、そろそろ食べないと』というような感じしかない。昔はその感覚が分からなくて倒れたこともあった。

「で、お前こそ何してんだ？雑誌の立ち読みなんて珍しいんじゃないか？」

聞いた話だけど、コイツはチェックすべき雑誌は全て買っているらしいので、立ち読みなんてするとは思えない。……まあ、買うという時点で、こいつの所持金と毎月の小遣いがいったいいくらなのかとかが気になるけど。

「別に大した理由はないんだが、ちよつと妹がこの雑誌の話をしていてな。」

「へー、妹がいたんだ。」

コイツの妹と聞くと、どうしても変なイメージしか出てこない。

なんというか……顔立ちとかは真面目そうで、成績はいいのに、天真爛漫な女の子。良自身、最低限の身だしなみは気にするらしいが、家では髪を梳かすなどしないらしいので、妹の方もボサボサの髪で……うん、切るのも面倒だからという理由で凄く長い髪とかしてそう。身長以上の長さがあつて、学校に行くときは括ったりして誤魔化してそう。

そんな俺の想像を知るはずもない良は、その先を説明してきた。

「妹の年代……俺たちより2年下なんだが、その年代でこの雑誌が流行っているらしい。」

良がそういい、こちらに見せた雑誌を見せると、単なる女性用のファッション雑誌だった。

「あれ？前に良が話してた方は流行ってないのか？」

俺は前に良が話していた雑誌を記憶を頼りに探し、取ってみた。

「ああ、そうらしいんだ。なんでも、そっちの雑誌よりこっちの雑誌の方が服が可愛いだとか。」

「へへ。」

俺は良から雑誌を借りて2つを見比べてみたが……全く分からない。どっちも同じような気がする。そりゃあ、微妙な差ならあるけど、どっちも可愛い気がするし、正直、どっちでもいい気がする。

「良は……分かるのか？この差が。」

「いや、認めるのは少し癪だが、分からない。」

「そうか。」

今まで、いろいろな雑誌を読んできた良が分からないというのは意外だが、それだけに、この雑誌の感覚は女性特有なのだというのが分かる。

「まさか俺に理解できない感覚があるとはな。世界は広い。」

高校2年生の時に痛感するものとしてはどうかと思うのはさておき、とりあえず俺はもう話すことはないので、弁当を買い、良に別れを言って、コンビ二を出た。

この辺りには特に娯楽はない。少なくとも、電車に乗らないとゲームセンターなんてものはないし、本屋すらない。電車に乗らずに行ける場所といえば学校かコンビ二かスーパーぐらいなものだ。それでも日常生活には困らないので、滅多に電車に乗ったりしない。俺はさっさと家に帰り、冷蔵庫の中に弁当を入れた。賞味期限は明後日なので、明日、万が一桜が来て飯を作ってくれたとしても、明後日の夜にでも食べればいいだろう。

俺は2階へ上がり、パソコンを付けた。昨日メールしたのが夜なので、たぶんメールが来ていると思ったからだ。

To X From グラッジ

自分にはよかった出会いなんてなかった。出会った人、ほぼ全員が殺したい人だった。友達は何論、両親さえ、なぜ自分を産んだの

かと恨んだ。だから、出会いを探す前に、定期的に過去を振り返り、自業自得だと思わないと、誰かを殺しそうだった。

俺は内容を読んで驚いた。……だけど、すぐにその驚きはなくなった。ネット上などでは、結構こういうことがあるということを知っていたからだ。日常生活では口に出せない欲求、不満、怒り、嫉妬。でも、ネット上では簡単に出来る。俺は楽観的に考え、とりあえず慰め……というより、なだめの文を書こうと新規作成ボタンを押そうとして気づいた。もう1つ、メールが着ていた。現在、俺のこのメールアドレスを知っているのはグラッジ1人のはず。なぜこちらが返信する前に送ったのだろうと不思議に思いながら、そのメールを開いた

T O X F r o m N O N A M E

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、当に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、つて。病、院、へ来てさ、あす、ぐに。人。へ、ル、

そんな文が書かれていた。……正直、意味が分からない。なんなのだろう、このメールは。差出人は『NO NAME』。つまり未登録。グラッジではない。間違いメールということはないだろう。文の中に『グラッジ』という人物の名前があることから、少なくともグラッジと知り合い。更に、俺の名前さえ出ている。……これは誰なんだ？それに、変な文の区切り方。今じゃあ使われてるのか分からないうような『、』の前か後を繋げると正しい文になる古い暗号かと思ったけど、紙に書いて試してみても『今えがつこ殺す本天るお父救病院さあすヘル』か『私の回いの人る当にお父さつ院へあくル』になつて、おかしい。じゃあ、この区切りはなんだ？途中から文がおかしいことから、明らかに無理矢理何かメッセージを作るために繋げたとは思えないのに……。……まあ、考えても仕方がない。どうせ俺には関係ないだろう。俺の名前が出ているけど、

変換ミスか何かだろうし、グラッジの弟か妹が悪戯で送ったのだろう。

俺は適当に前の文の返事を書き、メールを送った後、適当にパソコン用のゲームをやったり、宿題をやったりして時間を潰した。

始まりのメール予告

起きたときにはまた昼前だった。昨夜、ムキになってマインスイーパーの中級のタイムを縮めようと、4時ぐらいまでやっていたのが駄目だったのだろう。

俺は起き上がり、着替えて下に降りた。下は昨日と同じように静かで、冷蔵庫の中には昨日買っておいた弁当があるだけだった。もしかしたら、桜は一度来たのかもしれないけど、冷蔵庫に弁当があるのを見て、飯を作るのをやめたのかもしれない。アイツ、来ても絶対に起こしてくれないからなあ。

俺はレンジで弁当を適当に温めて食べた。

……さて、これからどうしようか。明日の飯……は、とりあえず桜が作ってくれると思う。だから、コンビニに弁当を買いに行く必要はない。

……仕方ない。メールでもチェックして、またゲームでもするか。一応、冗談だとは思うけど、昨日のグラッジのメールも気になるし。そう決めて立ち上がり、2階へ上がった。メール画面を開いてみると、予想通りにメールが1つ来ていた。

To X From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によって、灰になる。

次は連続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くににいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取っている。さあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ。

5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者、連帯者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらぬ目

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります

それだけだった。ただ、なんとなく予想できることは、本当に人を殺すつもりなら6時に行い、最初の殺し方は焼いて殺す。そして2回目には10人死ぬ。そして最後には俺……だと思ふ。分かるのはそれぐらいなもの。……でも、もし本当に殺すつもりなら、なぜこんなメールを送るのだろうか？漫画とかアニメで予告状を出す怪盗や殺し屋がいるが、そんなのは話を面白くするためにするだけ。実際にそんなことをしても、メリットは何もないはず……。……まあ、単なる冗談にそこまで真剣に考えても仕方ない。

そう結論して、メール画面を閉じ、ゲームを起動した。メールの返信を忘れていたことを途中で思い出したが、正直、どうでもよくなっていた。

始まり

ピピピピッ！ピピピピッ！ピピピピッ！

「……………朝か。」

アラームの音で目が覚め、時間を確認すると、当然のようにセツトした時間が目に入った。今日からまた学校なので、起きないとマズイ。俺は体を起こし、制服に着替えて下に降りた。

「……………あれ？桜は来てないんだ。」

1階がやけに静かだと思ったけど、まさか桜が来てないとは思わなかった。桜が来ない日なんて、日直で行くのが早い日ぐらいだし、それでも前日にはちゃんと言うのに…………。

ちよつと考えたけど、特に理由が分からなかったので、仕方ないので考えるのはあきらめた。どうせ学校へ行けば会えるだろう。学校に着くと、自分の席へ向かいながら、桜の姿を探した。自分の隣の桜の席。そこからグルッと教室内。しかし、どこにも桜の姿はなかった。すると、席にカバンを置くと同時にぐらいに、良が話しかけてきた。

「よう。桜ちゃんは？」

「いや、知らん。まだ来てないのか？」

まだ来てないとなると、考えられる原因は…………風邪…………かな？でも、アイツの場合、食生活とか生活リズムがいいせいなのかもしれないが、そういうことは滅多にない。

「快。…………お前…………何か怒らせるようなこと言っただんじやないか？」

良が俺を呆れるように見てくるが、その可能性はないと思う。金曜日の時に話した内容なんて、特になんでもない世間話だし、別れるときも普通だった。…………まあ、体調が悪いのだろう。滅多にないとはいえ、あくまでも『滅多にない』だからな。

良にそう言っていると、良も納得したのか、「そうだな」と頷いた。

「そつえば、昨日の火事だけだな。」

「火事？」

昨日、火事などあったのだろうか？昨日はそこまで早く寝た気はしないんだが……。深夜に起こったのか？

「知らないのか？……あゝ、いや、すまん。そういえば、お前の場合、眠りが深いからな。一度寝たらなかなか起きなかったな。」

良の言葉に、若干イラツとくるが、事実なのでしょうがない。桜が俺を起こさないのもそれが原因だし。

「で？そういうからには深夜に起きたんだよね？」

「ん？ああ。深夜も深夜。3時頃だったかな。」

「そんな時間になんで火事が起きるんだよ。放火か？」

自分で言っておいてなんだが、それはないかとも思った。ここ数年、事件らしい事件など、こちらで聞いたことがない。火事など、俺が小学校の時以来だ。

「いや、たんなるタバコの火の不始末らしい。」

「へゝ。で、その話がどうしたんだ？」

「いや。この火事なんだが、事故とテレビでも新聞でも言われてるんだが、どうもそんな気がしなくてな。」

「どういうことだ？」

「まず、その家の主は一応、35歳の独身男性らしいんだ。」

「一応って？」

「ほとんど本人と分らないほど体が焼けていたらしい。残った部分と、その家を買った人などを調べて判明したらしい。それでも、正直、『おそらく』というレベルでの確証なほど焼けていたらしい。」

「

「ふゝん。どうやって身元を判明させるのかは知らないけど、そんなに焼けてるなんて、ある意味凄いな。……………ん？でも、それでなんで事故じゃないと思うんだ？」

「周りの家に、一切被害がなかったからだ。」

「でも、そんなことって普通にあるんじゃないのか？人は中にいるんだから。」

「ああ。だけど、被害がないということは、それだけ早く火は治まったということだ。それだけの間に、そこまで焼けるには、そもそも本人に火を付ける以外、不可能だと思うんだ。」

「うーん……。」

確かに良の言いたいことは分かる。その家がどれだけ大きいかは分からないし、発火場所も分からないけど、少なくとも、火事になつていれば普通の人は寝ていても気が付く。おそらく、俺でも自分の家が燃えていれば気づくだろう。35歳ということを考えれば、むしろ窓を破つてでも逃げられたと思う。そう考えれば、確かに事故としてはおかしい。とはいっても、起こってるものは起こってるで考えないといけない。35歳なんだから、酒を飲んでいたとかが考えられるし、持病を持っていたとも考えられる。他にも足を骨折していたとかでもいい。いくらでも可能性はある。

「まあ、こう言ったら死んだ人が可哀想だけど、俺たちが考えてもどうにもならないって。俺たちは探偵でもなんでもないんだから。」俺がそう言くと、未だに悩んでいた良も「そうだな」とだけいい、席に戻った。

俺はカバンの中を机に入れながら、桜のことを考えた。俺にとっては火事より桜の方が大事だ。

金曜日は特に何もなかったはずだから、土曜日……は、確か昼に起きて、昼にちよつと食べてそのままコンビニに行つて、良と話しただけ。桜の性格的に、朝起きなかったからとかいう親的な怒りはないと考えれば、あとは部屋でダラダラ過ごしていただけだ。日曜日にも昼に起きて、特に出かけるでもなく、パソコンをして……あれ？何かが引つかかった。桜のこととは関係ない気がするけど、何かが引つかかる。なんだろう……？

気になつて、ずっと考えたけど、結局は答えは分からなかった。

違和感

昼休みになると、俺は桜の家に電話してみた。

『プルルル！プルルル！プルルル！』

「……………あれ？」

しかし、誰も受話器を取らずに、そのまま留守番電話になってしまった。確か、桜の父親は何をしているかは知らないけど、内職（それでも十分収入がいらしい）なうえに、母親は専業主婦。桜は体調が悪いのかどうかは分からないが、真面目な桜が学校に来ないという事態なのだから、両親のどちらかが出かけるのであっても、どちらかが残るだろう。あの両親は桜を凄く可愛がってるので、桜を置いて出かけることなど、月に一度のデートの日ぐらいだし…………（それはそれで問題がある気がするけど）。可能性としては両親も桜も出かけているパターンだけど、これも可能性は低いかな。知り合いの葬式とかが急に入ったなら分かるけど、それならそれで俺に連絡ぐらい入れるだろう。……………さて、どうしたものか。とりあえず帰りに桜の家によつ…………

『ブウーン！ブウーン！ブウーン！』

突然、携帯が振動し始めた。マナーモードの解除がいちいち面倒なので、当然といえば当然なんだが。

ディスプレイで番号を確認してみると、ついさつき電話したばかりの桜の家の電話番号だった。俺はすぐに携帯を開いた。

「もしもし、桜か？」

番号は桜の家だったので、桜の両親という可能性もあったが、そもそも桜の両親は俺の番号を知らない。もしかしたら、体調が悪い桜に代わって掛けてきた可能性もあるけど、桜の両親と電話で話したことなどないせいか（というか、桜や良以外と電話で話したことはほとんどない）自然と桜と考えて対応してしまった。

『もしもし。私だよ。』

しかし、予想通り相手は桜だった。

「ああ。どうしたんだ？さっき電話したけど、出なかったじゃないか。」

『あ、ごめんね。ちょっと忙しくて、出られなかったの。』

……あれ？また何か違和感が……。さっき、昨日のことを考えてたときにも何か引つかかったけど、今度はまた、別のことで引つかかるような……。

「そ、そうか。で、どうしたんだ？」

『どうしたって？』

「いや。今日、学校に来てないから、体調でも悪いのかと思って。」

『あ、うん。ごめんね。ちょっと体調が悪くて。』

何か……何かが引つかかる。昨日のことで引つかかったのは一瞬だけど、今はずっと引つかかっている感じだ。声は明らかに桜のもの……だと思う。電話越しだから確信を持って言える訳じゃあないけど、桜だと思う。というか、今回は向こうから電話をかけてきたのだから、桜のフリをする理由がない。

「そうか。じゃあ仕方ないな。早く元気になれよ。」

いくら考えても答えは分からないので、俺はさっさと会話を終わらせようとした。考え事に集中し過ぎて、体調が悪い桜に気を使わせたら悪いからな。

『うん。じゃあ、またね。』

「おう。……………ふ〜。」

向こうが電話を切る音がした後、俺の方も電話を切り、一息ついた。桜がとりあえずは元気だったという安心感と、電話中に引つかかった違和感からの疲れがきた。なんで桜との電話でこんなにも疲れないといけないのかと思うけど、桜に当たっても仕方ない。

俺は考え事をさっさと切り上げて、良の待っている教室へ戻った。アイツも桜のことを心配していたので、一応、元気だったことは報告しとかないとな。

「おお、快。桜ちゃん、どうだった？」

「元気そうだったぞ。あれなら、明日は来るんじゃないか？」

「そうか。それはよかった。」

その後は、黙々と昼飯を食べた。基本的に何でも話せる良だが、それゆえに話を振ると深いところまで話してしまうので、話を振るときは注意しないと、こつちがついていけなくなる（本人も自覚してはいるらしい）。だから、自然と良と付き合う奴はあまり自分から良に話を振らない。それは俺も例外じゃないけど、それでも一緒に食べるのは、ただ単に俺に友達が少ないのと、沈黙が苦痛じゃないことや、フツと浮かんだ何でもない話でも、ちゃんと付き合ってくれるからだろう。

逃避

「じゃあ、俺は帰るぞ。」

帰りのHRが終わり、桜の様子を見に行くか行かないかを迷っている、良は俺にそう告げて、さつさと帰っていった。まあ、良は桜や俺の家とは反対方向だから、お見舞いに行こうにも、結構な遠回りになるからな。桜が元気だと分かった今、様子をに行く必要もない。

……でだ。結局は行くか行かないか。電話越しでは、結構元気そうだったけど、俺に心配させないために元気そうに振舞ってたという可能性もある。でも、それならそれでお見舞いに行って元気じゃないところを見られる方が桜は嫌だろう。しかし、俺としては桜の状態は知っておきたい。これで見に行かずに、明日桜がこなかったら心配で心配で胃に穴が開きかねん。

そう決めた俺は、立ち上がり、教室を出た。とりあえず、お見舞いの品を買っていく……にはスーパーは逆方向なので、一旦家に帰って、冷蔵庫にあったと思うイチゴを持って、桜の様子を見に行こう。

俺はさつさと歩き、校門を出て家に向かった。家に帰ると冷蔵庫にイチゴがあることを確認して、一応、今からお見舞いに行くと連絡しようと思い、桜の家に電話してみた。

プルプル！プルプル！プルル、ガチャ

『もしもし？』

今度は昼のように切れることなく、桜が電話を取った

「あ、桜か？快だ」

『あれ？どうしたの？』

うっん……やっぱり違和感がある。なんだろう？

『もしもし？』

「あ、すまんすまん」

今考えるのはやめとくか。今の桜にあまり心配をかけるわけにも
いかないし。

『それで、どうしたの?』

「いや、これからお見舞いに行こうと思ってな。行っても大丈夫か
?」

『え!? 今から!?』

桜の声は俺の予想に反して、なぜだか驚いた……というより、都
合が悪いような声だった。

「どうした? 駄目か?」

『駄目…… ってわけじゃないけど……』

妙に歯切れが悪いな。普段なら良いか悪いかはつきり言うのに
……。そりゃあ、付き合いが長くても、桜も女の子なんだから、風
邪の時に来られると困る理由はいくつか思いつくが、それを考えて
も、なぜそんな反応になるのかが分からない。もしかして、年頃の
女性の感覚って俺が思うより繊細なのか?

「いや、駄目なら駄目って言ってくれ。俺はただ、桜のことが心配
だったただだから。」

『あ、そうなんだ。ありがとう。でも、私は元気だよ?』

「お前の場合、我慢してることだってありえるだろ。」

『もう。そんなことないって。』

「そうか?」

『うん。心配してくれてありがとう』

「じゃあ、明日は絶対に来いよ?」

『うん、分かった。』

俺はその言葉を聞くと電話を切り、一息ついた。まだ嘘を付いて
いたという可能性もあったけど、あそこまでしつこく聞いたので、
その可能性もほとんどないと言っていいだろう。もし明日また休ん
だら、今度こそ無理矢理押しかければいい。

俺はそう心に決め、自室へ荷物を持って上がった。宿題があるが、
とりあえずパソコンをつけると、インターネットに朝に良が言っ

いた火事が大きく出ていた。簡単に読んでみたが、良が言っていたことと変わらなかった。ただ、最後に、良が言ったように『明らかに焼け方がおかしい』と書かれていた。俺は良に感心しながら、メール画面を開いた。特に新着メールはなかったが、開いた瞬間、良から話を聞いた時に感じた違和感に気がついた。昨日のグラッジからのメール

『始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。』

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によって、灰になる』

事件が起きたのは3時。書いてある時間より9時間も後だ。……でも、文章は確かに焼けて死ぬと書いてある。単なる偶然……にしたらタイミングがいい気がする。例えば、6時に始まるというのは俺を騙す嘘という可能性もある。他にも犯人は別にいるけれど、何らかのことで犯行が起こるのが6時だと知った。けど、相手の事情で時間が変わってしまったとか……。もしくは、グラッジ本人が犯人だけど、グラッジの事情が変わった可能性もある。それとも、やはりただの偶然か……。

「ああ！くそっ！」

俺は頭を思いっきり掻き、髪をグシャグシャにした。昔からイライラするとそうしてしまう癖がある。やめようと思っても、やはりやってしまう。……とにかく、考えてもきりがない。もう考えるのは諦めて、偶然ということにしよう。もし偶然じゃなかった場合、あと4回殺人が起こったあと俺は殺されるらしいが、今の時代、そう簡単に人が殺されるということ自体がおかしい。俺も両親も特に偉い人じゃないし、知り合いにもいない。だから、狙われる理由もない。だから、これは単なる偶然だ！

そう決め付けて、俺はゲームに没頭することにした

第2の犯行

今朝は目覚ましで鳴る前に起きたうえに、寝起きもよかった。

俺はいつも通りに着替え、下へ降りた。下へ降りてきたが、今日もまた、桜はいなかった。まあ、おそらく、風邪が直ったばかりだから、念のため来なかったのだろう。もしこれで学校にいなかったら、今日こそ本当に家に押しかけるしかないな。俺は荷物を玄関に用意して、自室で漫画を読み、ちょうどいいぐらいの時間になると、家を出た。

昨日と同じように1人で通学路を歩くが、やはり違和感がある。まあ、それも今日までだろうとその新鮮な気分を味わいながら歩いた。

学校に着くと、妙に学校内が騒がしかった。

「ねえ、聞いた？昨日の事件」「昨日の夜、校舎やグラウンドにあった不思議な液体の跡だろ？」「そうそう。先生たちも、初めは理科の先生が何かの薬品を落としたんだらうって言ってたけど、昨日の放課後は理科の先生、夜残ってなかったらしいよ？」「俺が聞いた噂によると、あれ、血らしいぜ？」「うそ〜！なんで学校にそんな跡があるのよ。」「知らねえよ。それにあくまで噂だよ。」「

歩いてるだけで聞こえる内容でも、物騒なワードが聞こえる。こういうときは、さっさと教室に向かうべきだな。悪い内容にしろ、単なる勘違いにしろ、良なら情報が早いだろうし、良自身の考えが聞けるからな。

教室に入ると、すぐに良がやってきた。

「学校中騒いでるから知ってると思うけど、朝、校舎やグラウンドに血の跡があったんだ。」「

なんとなくそうじゃないかと思っていたが、良が断言するとは思わなかった。

「なんで血だって分かるんだ？」

「第一発見者が俺だからだ。」

良は普段から学校に来るのが早くて、いつも教室で予習をしている。だから、その跡も発見できたのだろう。

「でも、なんで血なんて分かったんだ？」

「当たり前だろ？いくらなんでも、学校内に血と間違えるような液体は置いてない。少し見れば分かる。」

確かにそうだ。実際、どのくらいの跡かは分からないが、血の跡なら普通は分かる。

「……で、なんの血かは分かったのか？誰か死んだのか？」

一瞬、思いついたのが桜。桜はまだ来ていない。風邪おそろくだから、来るのが多少遅いかもしれないし、やはり悪化して家にいるのかもしれないが、それでも心配だ。

「まだ分かってないけど、俺が見つけただけでも5箇所、血の跡があったんだ。もしかしたら他にもあったのかもしれないし、5箇所に血の跡があったからといって、被害者が5人とは限らない。」

良も桜を思い浮かべたのか、少し落ち着きがなかった。だけど、逆に俺は落ち着いていた。昨日とは違い、すぐに思いついた

「もしかしたら、血の跡は10箇所あるのかもしれない。」

「……どうということだ？」

落ち着かずにブツブツ呟いていた良だが、俺がそう言うと、瞬間、怖い目つきになって俺を見た。

「前に、グラッジという人とメールをしているって言っただろ？」

「ああ。あの文通か。まだ続いているのか？」

「いや、続いてるって言うかは分からないけど、最後のメールに気になることが書かれてるんだ。」

「気になること？」

説明するより見せたほうが早いと思い、携帯を取り出して、パソコンのメールボックスを開いて、そのメールを見せた。

To X From グラッジ

始まるのは6時。1日1回。最後の6回目に貴方。

最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によって、灰になる。

次は連続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。

3つ目。後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え。

4つ目。泥棒は物を盗むだけ。強盗はもっと大切なものを取っている。さあ氣をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ

5つ目だ。ゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらぬ目

最後に貴方。永遠に感じられる日も終わりが来る。さあ、貴方の元へ参ります

確信はもてないけど、おそらく間違いない。

『近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。』

学校の人なら、近いとも近くないとも言える。それに知っているとも知っていないとも言える。

「昨日の火事も時間はともかく、内容は一致してる。」

「……確かにそうだけど、問題は快の言うように時間だ。今回は分からないけど、昨日の火事は深夜3時だ。9時間の差がある。」

良も俺と同じ考えのようで、悩んでいる。もしこの内容が本当なら、明日にはまた誰かが死ぬ。次は今までのように分かりやすくは書いてないが、何か後ろめたいことがある人。つまり、何か犯罪を犯した人だと思う。

「良。次のことを考える前に、まず今回と前回のことを考えよう。」
次のことを考えていると顔に出ていたのか、良はそう言い、一文一文指差しながら確かめた。

「まず昨日の火事。時間は置いておくとして『地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる』。」

「これはそのままの意味で、丸焦げになって発見されたら？」

「ああ。次は『自らが招いた炎によって、灰になる』。」

「これは……灰とまではいなくても、誰か分からないほどに焼けてたんだろ？」

「ああ。じゃあ、1つ目は正しいってことか。」

もう既にこの時点で、俺も良もこの文が全てこれから起こることだということをなんとなく予感している。でも、そうでなくて欲しいと思いつつ、次を確かめる。

「『続殺人、殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人』。」

「まだ10人死んだかは分からないし、血の跡も分かってるので5箇所だな。」

「……つまり、これで残り5箇所が見つかって、死んだのも10人だと分かったら……」

良は最後まで口にしなかったが、お互いに分かっている。……いや、この結果が出る以前に、今の時点で、この文が本物だと分かっている。

「じゃあ、次は今日のやつか。」

「ああ、そうだな。」

「『後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改め、罪を償え』。」

「良……意味、分かるか？」

「よくは分からないけど、おそらく、犯罪を犯した人だ。でも、捕まっていない人だな。」

「なんで捕まっていない人なんだ？」

途中までは俺と同じだったが、良は『捕まっていない人』と断言した。

「グラッジ自身も、わざわざ刑務所に入って殺すわけがないから、対象が犯罪者だと仮定すると、まだ捕まっていなかったか、釈放されたかだ。だけど、文の後半に『過去を悔い改め、償え』と書いてある。釈放されたからといって悔い改めるとは限らないが、償えってことはまだ償ってないって事だ。だから、たぶん捕まっていなかった人だ。」

「なら、余計に探すのは無理じゃないか。」

まだその犯行を止めると決めたわけじゃないが、誰かが死ぬと分かっているのに、みすみす見逃すようなことはしたくない。でも、警察でも捜しきれない人を探ることなんてできるわけがない。

「いや、そうとは限らない。例えば犯罪を犯していても、犯罪が起ったことを知られていなければ捕まることはない。」

良のいうことはもつともだ。……でも

「なら、なんでグラッジはそいつが犯罪を犯したことを知っているんだ？」

「それは……」

良もそれを考えていなかったのか、すぐには答えられず、考え込む。可能性としては、対象が犯罪者ではないということだけど、他に考えられない。ここまでストレートに書かれていたのに対して、いきなり趣向を凝らした文にするとは思えない。

キーン！コーン！カーン！コーン！

しかし、そこでチャイムが鳴ってしまい、考えは中断させるしかなくなってしまった。

……けど、それはちょうどよかったかもしれない。今は考えることが多くて、頭がいっぱいだ。桜は無事なのか？グラッジの目的は？殺されるとしたら次に殺されるのは誰？

頭の中で考えるが、余計分からなくなる。先生が何か言っているが、それも右から左に抜けていく

「えー、皆も知っていると思うが、この学校の至る所に血の跡があった。」

たまたま聞こえた先生のその言葉に、クラスの人

「あ、やっぱり血の跡だったんだ」「ねえねえ。じゃあ誰か死んだの?」「いや、死んだとは限らねえだろ」「でも、怪我はしたってことでしょ?」「案外、動物の血かもよ?」

皆、好き勝手に喋りだした。俺としても、動物の血であってほしいし、例えば人のものだったとしても、怪我で済んでいてほしい。

「血については警察の方が調べてくれてるが、とりあえず、念のために今日の欠席の家庭には連絡するように職員会議で決まった。今日の欠席は……天野と増田か。誰かすぐに連絡が取れる人はいるか?」

俺はすかさず手を挙げた。桜は携帯を持っていないので、直接家に電話をかけることになるが、とにかく一刻も早く無事を確認したかった。

「じゃあ深峰。天野にはお前が連絡を取れ。他のクラスもホームルーム中だから、あまり大きな声で話すなよ。」

俺は先生の注意を聞き流しながら、早足で廊下に出て、携帯の電話帳から桜の家の電話番号を見つけ、ボタンを押した

プルルルル!プルルルル!プルルルル!

……でない。いくら待っても、誰も出なかった。時間を見ても、携帯電話の時計は8時45分と表示されている。この時間なら、少なくとも両親のどちらかは起きているはずだ。なのに、なぜ誰も出ないんだ?

ついには留守番電話の声が聞こえてきて、焦りが増す。俺はすぐにもう一度桜の家に電話をかけた。

プルルルル!プルルルル!プルルルル!

(頼む桜。出てくれ)

心の中でそう願いうも、また留守番電話の声が聞こえてくる。

俺は急いで教室に戻り、先生に早退をしたいと言った。

「だが、まだ何かあったと決まったわけじゃあ……」

「そんな!お願いします。早退させてください!」

俺は先生に頭を下げて、そうお願いした。もし、ただ単に寝坊し

て寝ていただけなら『よかった』で終わる話だ。でも、もし何かあったなら、探すなり何なりしないといけない。こうして話している間にも桜がヤバイかもしれないと、落ち着いてなどいられない。

そしてとうとう、未だに迷っている先生に向かって、「すみません」と叫んで教室を飛び出した。後ろからは先生が俺を呼ぶ声が聞こえるが、そんなものは無視して走った。

犯人

桜の家に着くと、俺はインターホンを押すなど考えず、すぐに玄関を開けようとした。

ガチャガチャガチャ！

だが、扉は開かなかった。普通に考えれば当然のことだが、桜の家に限っては例外。この辺りは決して犯罪0というわけではないのに、桜の母親は家にいるとき、鍵をかけない。勿論、家に誰もいないなら鍵をかけるだろうが、昨日今日と娘が学校を休んでいる中、娘を置いて出かけるだろうか？……………まさか、桜も母親も学校の事件に巻き込まれたのか！？

一瞬、俺の脳にこの中で血まみれになって倒れている桜と母親の映像が浮かんだが、すぐに冷静になり、事件が起こったのは学校だと自分に言い聞かせ落ち着かせた。

俺はもう一度ノブを捻り、開かないことを確認すると、インターホンを押した。漫画やアニメみたいに、植木鉢の下に鍵があるなんてことはないし、幼馴染ということ合鍵をもらってるなんてこともない。

1秒、2秒、3秒……。音が鳴り止んでから十数秒。俺はノブを掴み、足が動かないようにドアの横にセットして、思いつきり引いた。例え壊れても……というより、壊してでも中に入る！

「ぐっ……！くっ……！」

バキッ！

「ガッ！」

思いつきり引くと、ドアはいとも簡単に壊れた。その反動で仰向けに倒れてしまったが、すぐにドアを避けて起き上がり、中の様子を見てみた。

中に変わったところはなく、入る前に想像した様子の何百倍もいい状況に思えた。……だが、すぐにそうも考えていられなくなった。

玄関に置いてある靴が2組。綺麗に揃えておいてあった。桜と母親の靴。母親の靴はあまり見たことがないが、桜の方は確実に断言できる。これは桜のだ。

俺は靴を揃えるのなんて気にせずに、急いで靴を脱ぎ捨て、家に入った

「桜！いるんだろ！？」

2階にある桜の部屋。その扉を開け叫んだ。そしてそこには、

予想外の光景と、願った光景があった

「やっぱり……快だっただね。」

……快？桜の俺の呼び方に違和感を感じるが、今はそんなことを言ってる場合じゃない。桜は部屋の隅にある机の近くに血まみれで立っていたのだ。

「桜！どうしたんだよ、その血は！？痛くないのか！？」

俺はそう聞くが、桜自身は全く痛くなさそうなうえに、凄く悲しそうな顔をしていた。

「……………」

だけど、桜は何も喋らない。……いや。というより、何を喋ればいいかが分からないかのような様子で黙って俺を見ていた。

「……どうしたんだよ……桜。」

俺は意味が分からずにゆっくり桜に近づき、桜の肩に手を置こうとしたが……

「……桜？」

なぜか桜は俺の手を腕で受け止め、唐突に隣にあったスポーツバツグを持ち上げ、歩き出した。

「おい！桜！どうしたんだよ！？」

明らかにいつもと様子が違う。さっきの俺の呼び方も含めて、まるで桜と同じ姿を別人のようだ。

「下で話そ？答えれることなら答えるから。」

桜は振り向くことなく、ドアの前で立ち止まって、そう言った。

桜は俺の返事を待たずに歩き出したので、俺はそこで止められなかったが、とにかく、下に行けば聞きたいことを答えてくれるのだということを信じ、桜を追いかけた。

「コーヒー、お茶、水ぐらいしかできないけど、何か飲む？」

桜は台所に行くと、冷蔵庫を開け、そう聞いてきた

「いや、いらない。」

俺がそう答えると、桜は「そう」とだけ呟き、コップを1つ取り出し、それに水を入れて椅子に座った。俺はその対面に座り、何から聞こうかと迷った。聞きたいことはいくらかでもある。まずは何から聞くか。今の桜は明らかにおかしい。

……迷っていても仕方がない。俺は質問を決め、さっそく聞いた。
「親は？」

普段は家にいる桜の親が、今はいない。けど、さっき見たときは確かに靴があった。桜は体調的には元気そうなので、家にいなくても買い物なのかと思うが、靴があるのはおかしい。俺は初めは軽い質問をしたつもりだったけれど、予想外の返事が返ってきた。……考えもしなかった、最悪の返事が

「殺した。」

「なっ……!!」

予想外過ぎて……いや、想像すらしなかった返事が返ってきた。

「なんで！」

俺は大声で叫び、机を叩いた。だが、桜はそんなこと気にせずに、水の入ったコップを持ち上げ、飲んだ。普段の桜なら、当然ビツクリするような状況を、まるでなんでもない些細なことのような顔をして無視している。その態度が、余計にこの桜はいつもの桜と違うと、余計に思わせる。

「グラッジって、覚えてる？」

「え？」

桜は突然、聞いた質問と関係があるとは思えないような言葉を口にした。

「グラッジって、あの数日前に俺がメールを始めた、あのグラッジか？」

「そう。あれは……私。」

「な！」

この家に来たときから予想外の連続だが、今回のが一番予想外であり、意味が分からなかった。

「快のために、順序立てて教えてあげる」

「……………ああ」

俺は心を落ち着かせ、桜の言葉に耳を傾けた。

「グラッジは英語で『恨み』って意味」

「恨み？」

余計に頭が変になってくる。確かに、桜も人間だ。だけど、桜が人を恨むなんて考えられない。それも、本当にグラッジで、あのメールが本当なら、桜は今日までに11人殺していることになる。それほどまでの恨みがあるとは思えない。

「私は昔から最近までに、どうしても許せない人が14人いるの。まあ、最初は4人だったけど。残り10人は最近。」

「14人？……15じゃないのか？」

すぐにメールの内容を思い出す。細かいところは分からないが、確か、2回目以外は1人殺す内容で、4つ。10人が1つ。そして俺。合計15人のはずだ。

「快は少し違うの。」

「違う？」

「快の前で言うのはなんだけど、確かに最後には私、快を殺すつもり。」

もしこれが普段の桜の口調、雰囲気なら、『正面から殺人予告なんて始めての経験だな。』なんて笑って終わらせれただろうが、今

の桜からはまるで冗談な気がしない。おそらく、順番が来れば本当に殺すのだろう

「なあ、なんで人を殺すんだ？それに母親まで殺して。」

「お母さんは例外。私も殺す気はなかったの。最後まで、気づかれずに14人殺して、最後に快に全部話して一緒に死ぬつもりだったから。」

「……………」

桜の言葉に何も返事ができなかったが、もう桜の言葉を疑うわけにはいかない。部屋で会ったときからずっと、悲しそうな目で俺を見ているのがその証拠に思えた。

「話を戻すね。次に、私は今の快が知ってる桜じゃないことは分かるよね？」

「やっぱり……違うのか」

思っていたけれど、たんなる気の迷いであつたほしいと思っていた。でも、桜の言葉を聞いて、確信した。解離性同一性障害。簡単に言えば、多重人格という精神病を聞いたことがある。おそらくそれだろう。

「『天野桜』は3人いるの」

「3人？」

2人なら分かるけど、3人？

「今の快が知らない桜。今の快が知ってる桜。そして私。」

確かに3人だ。だけど、今の俺が知らない桜？ということは、出会う前の桜？それなら俺が知るはずもない。……だけど、それどう関係があるんだ？

「まず、今の快が知ってる桜は、本当の桜じゃないの。」

それは、なんとなく分かる。今の俺が知らない桜がいるなら、それは出会う前の桜。つまり、俺が知っているのは偽者ということになる。

「私以外の桜のことは話せないけど、私の役目は話せるけど……聞く？」

「役目？」

「多重人格者になる人は、精神的に苦しんだ人。だから、生まれた人格は何かの役目があるの。」

「……そうか……。それじゃあ、お前の役目は？」

「恨み」

その答えは、なんとなく予想していた。わざわざ『私がグラッジ。グラッジは恨みという意味』と教えてくれていたのだから。

「私は他の私が持っているはずの恨みの全てを持ってるの。」

「……それが爆発して、恨みのある人を殺すって？」

「そう」

俺の言葉に、桜は迷いなく頷いた。

「……なあ、その恨みって、なんなんだ？最後に俺を殺すってことは、俺も何かしたってことだよな？」

「教えてもいいけど、それじゃあ意味ないの」

「意味ないって言ったって、分からないんじゃない？どうしようもないじゃないか！」

いい加減、桜の対応に腹が立ち、思いっきり机を叩いた。その振動で、今度は水の入ったコップは倒れ、水がこぼれたが、桜は驚きもせず、近くにある布巾で机を拭いた。

「まず、快はそのことを忘れてるだけ。」

「忘れてる？」

「よく思い出してみて。快が小学校の時。」

そう言われても、小学校の時の記憶なんてこの年じゃあ曖昧過ぎる、ちゃんと覚えてる奴なんていないだろ……

「別に小学校の時の記憶全部じゃなくていいの。不自然な記憶の繋がりがいい？」

「不自然な繋がりが？」

小学校は1年生から6年生まで。桜と出会ったのは小学校入学前だから、1年から6年までの間。その間、桜と同じクラスだったのは確か……。1年、2年……。4年、5年、6年だったか？確かそう

だったはずだ。だけど、例え別のクラスだったとしても、桜とは一緒に遊んだりしたはず。

……いや、まで。不自然な記憶を探すんだ。実際にあるはずのない記憶。前後の繋がらない記憶。

「……………」

「……やっぱり、分からない？」

黙っている俺に、桜は残念そうな、それでいて確信していたような声でそう言った。

「なあ。頼むから教えてくれよ。」

「それは死にたくないから？ 私に謝りたいから？」

2度目ということもあつてか、桜は俺がそう聞くことが分かっていたかのように、俺の言葉のあとすぐにそう聞いた。

……だけど、どうなんだろう。死にたくないのは当然だ。何か悪いことをしたって言うなら、謝りたいって気持ちもある。……けど、

今の俺の気持ちは死にたくないって理由が大きい気がする

「もしもね？ 快が思い出したとしても、私は快を殺すよ。」

俺が答えを出せないでいると、桜は小さくそう言った。

「例えば頭を下げて謝ったとしても、私にしたことと同じこと……うん、それ以上のことをしてもいいって言われても、たぶん殺すよ」

「……………そこまで酷いことを……俺はしたのか？」

俺はいつたい、どんなことを桜にしまったんだろうか。

俺は自覚のない自分の過ちにだんだんと怖くなりながらそう言ったが、突然、桜はなぜか初めて呆れたような顔になりながら言った

「ううん。違うよ。私のこの恨みは、単に自分勝手なだけ。」

「自分勝手なだけ？」

「そう。今考えれば、とても些細な事。笑って許せること。……だけれどね、快。子供の精神って、凄いだよ？ 1度感じたことは、なかなか消えないの。消そうと周りの人も協力してくれれば消えるかもしれないけど、何もしなかったら、そのまま残るか、余計に強くなるの。」

「……つまり、初めはそこまで深刻じゃなかったけど、ほつといたから強くなったのか？」

「うん。だから私の身勝手。だから、快も私に反抗する権利はあるの。今ここで……私を殺す権利も」

桜の目は冗談を言っている雰囲気はなかったが、ここで殺される気もないと言っていた。

「……じゃあ、これから俺が選べるのは、俺と、あと数人が殺されるか、お前を殺すしかないのか？」

「……………うん」

桜自身も実際は辛いのか、顔は暗くなっていた。

「それで、どうする？ 私はこれから毎晩、順番に殺していく。それまでに快は私を殺す？ なんなら、今すぐにでも。」

「……どうしよう。これから殺される人、もう殺された人。桜は元は優しい人だから、罪のない人を殺すとは思えない。いくら身勝手だと言っても、絶対に殺される人は罪がある人だ。だから、それは俺も含めて償うべきだと思う。けど、問題は殺してまですることなのかだ。……なら、今ここで桜の骨を折っても止めるべきか？ 桜は片手な上に、身体能力は俺の方が上のはず。戦って勝てないことはない。」

ガタン

力で押さえ込む案に決めようとした瞬間、向かい側の桜の席から音がした。見てみると、桜は立ち上がり、コップを流しに持ってきて、コップを置くと、ポツリと呟いた。

「……………やっぱり……………そうするんだ」

「！」

具体的に桜は今、押さえ込むなんて言わなかったが、明らかに俺が考えていることが分かったようだった。

俺は反射的に立ち上がり、桜へと走った。空手の経験など、格闘技の経験はないが、それは相手も同じ。思いつきりお腹を殴れば、動けなくなるだろう。そう考え、一気に桜に近づき、お腹目掛けて

パンチを打ち込んだ

「……ごめんね」

しかし、桜に避けられ、耳元でそう言われたかと思うと、逆に自分のお腹に殴られた感触と痛みが襲ってきた

「さく……ら……」

一瞬で痛さで立てなくなり、倒れたが、片目だけは開けて桜を見た。

「ごめんね」

桜は申し訳なさそうな顔をしながらもう一度そう言い、ついに歩いていってしまった。すぐに追いかけてようかと思うのに、体は動かず、どんどん目の前が暗くなっていき、ついには気を失ってしまった。

止める

「……い！……おい！」

誰かが叫んでいる。……ここはどこだ？……ああ。目を閉じてるからか。……あれ？開かない？……

「……ん？」

よくやく目が開くと、目の前に良の顔が凄く近くにあった

「……………」

「よかった。目が覚めたのか」

「すまんが、とりあえず顔が近い」

俺がそう言うと、良は謝りながら俺から離れた

「それで、どうしたんだ？桜ちゃんの様子が心配になって来たんだが……………」

桜？……………！

「そつだ！桜は！？」

「だからそれがしんぱ……………て、どうしたんだ？そんなに慌てて？」

未だに状況が分かっていない良だが、とりあえず俺は落ち着き、今あったことを話した。

「そつか。確かに、その話が本当なら慌てるのも分かる」

「それで、今は何時だ？俺はいつたい何時間気絶していたんだ？」

「今は17時だ。」

「9時間も気絶していたのか！？」

「そつなるな。」

「急いで桜を探さないと！」

「待て、快！」

「急がないと！もうすぐ18時だ！誰かが殺されるんだぞ！？」

「待てって言ってるんだ！」

急いで家から出ようとする俺を良は無理矢理組み伏せた。

「むやみに探しても意味がない。それより、お前に届いたメールを

頼りにした方がいい。」

「くっ……！」

ほんの少し落ち着いた自分の頭でも、その方が効率がいいと思う部分があるが、未だに落ち着かない部分では、解読なんて出来ないと諦めている自分がいるが、ここは頷くしかない。

「まず1つ目と2つ目だ。法則性なんかを見つけよう」

「『最初は地獄の炎が身を焼き、その体は二度と動くことはなくなる。自らが招いた炎によって、灰になる』それから『次は連続殺人殺すのは10人。残すのは10の跡。近くじゃないけど近くにいる人。知らないけど知っている人。さあさあ次に死ぬのは10人。』だったな」

携帯で文章を見ながら、音読した。言い終わった後も良は黙っていたが、ゆっくり口が開いて、自信なさげに言った

「1つ目だが、火事なのは分かってるとして、快が桜ちゃんから聞いたことと、文章から、殺すのはあくまで1人。つまり、火事でありながら、1人しか死なない状況。だから家で死んだと考えられないか？」

確かに、結果から見ればそう思う。他に火事で死ぬ状況だと、いくらなんでも被害者が出てしまう可能性がある。桜が言うには、あくまで殺すのは1人。

「…………でも、それは火事だつて分かってるからだろ？内容は『丸焦げになる』『自分で発火』の2つしか書いてない。つまり、結果が火事だっただけだ。他にもこの条件を満たす殺し方があるかもしれない。」

「問題はそれだ。結果が分かってるから、どうしても結果から考えてしまう。何か……その方法じゃないと殺せない証拠がある。」

証拠……。文以外でのヒントなんて、桜が恨みを持っている相手。つまり、桜と面識のある人間。そんなの、分かるはずがない。

「さてよ……。快。桜ちゃんは確か、解離性同一性障害と言っていたな。」

「ああ。けど、それがどうしたんだ？」

「それで、人格は3つ。『今の快が知らない桜ちゃん』『今の快が知ってる桜』『そして恨みを持つてる桜ちゃん』。」「

「ああ。」「

ここまで聞かれても、俺には良が何を考えているのかが分からない。

「それと、殺す人10人は、最近できたっていうのは、おそらく昨日の10人」

「だから、そんなことが分かったって、どうだって言うんだよ」

「残り4人は、つまり、昔の……今のお前が知らない桜ちゃんの時に起きたことってことだ。」「

「そんなことは分かっている！だからどうしたって言うんだ！」

いい加減、良の言い方にイライラして、大声を出した。しかし、良は気にした様子もなく、話を進める

「ポイントは2つ。俺はお前から聞いた話でしか知らないが、昔の桜ちゃんは人見知りだったんだろ？ずっとお前と一緒にいるぐらい」

「ああ。」「

「出会ったのが小学校入学前。そんな時の記憶で、殺したいほどの相手が現れるとは思えない。特に、最初に殺されたのは35歳の独身男性。そんな人と一対一で話すわけがない。話したとしても、お前とは四六時中一緒にいたんだ。お前と面識がないわけがない。」「

……そうか。今なら分かるが、昔の桜がそんな年上の人とまともに会話ができるわけがない。小学校の中でさえ、面識のない教師に話しかけられただけで泣いていた桜だ。外で知らない男性に話しかけられたら、泣いて近所の人が駆けつけるだろう。でも、そんな桜でも、俺と一緒になら、体のほとんど全部を俺の体で隠しながらだが、ゆっくりオドオドした調子で喋ることができた。だから、俺とはほとんどずっと一緒にいた。外にもあまり出ない奴だったみたいだから、余計にありえない。

「第2に、口調だ。」「

「口調？」

「俺の知ってる桜ちゃんは常に丁寧語だった。昔の桜ちゃんはもうだった？」

「どうだっただろうか。グラッジのような喋り方？そう考えれば、そんな気がする。でも、今も昔も変わらないと考えれば、そんな気がする」

「おそらく、グラッジと同じ喋り方のはずだ。」

「なんでだ？」

「グラッジの役目は『恨みを晴らすこと』。つまり、口調まで変わる理由がない。」

「でも、恨みを晴らすってことは、荒っぽいイメージがあるんだが？」

「可能性としてはそれもある。だけど、それよりも、解離性同一性障害になった理由が『恨み』で、その中にお前が入ってるってことは、お前にも原因があるってことだ。ここで考えるのは、人見知りの桜ちゃんが信用したお前に、何かしら恨みを持つようなことが起きたことだ。お前なら、一番信用していた人に裏切られたら……どうする？」

「どうする？……どうするのだろうか？一発殴る？いや、一番信用していた人に裏切られたなら、一発じゃあ済まないかもな。もしくは、信用していた奴だから、何かの間違いだと思って、ただただ困惑して、聞き返し続けるかもしれない。」

「……たぶん、呆然として、その後は……たぶん、忘れてると思う。たまに思い返しても、すぐに気を取り直して、他の友達と楽しくやると思う。」

「ゆっくりと、そう言った。実際には分からないけど、たぶんそうなるだろう。一時は悲しくて、恨めしく思うだろうけど、すぐに過去の出来事にして、楽しくやると思う」

「じゃあ、その他の友達さえいなかったら？楽しいことなんて、何もなかったら？」

「……………」

これは桜の場合。俺が何か桜に恨まれるようなことをした場合、桜はこういう行動を取るか。誰も友達がいらない。どうすればいいか相談する相手もない。親は桜の内気な所を心配していたから、相談なんてなかなかできるものじゃあない。俺なら……………距離を置いても、なんとかやっていけると思う。例えばそのとき友達がいなくても、頑張れば作れると思う。……………でも桜は？ずっと友達ができず、唯一話せる人にも裏切られたら、どうするだろうか。たった1人で過ごす？……………それはないと思う。桜は人見知りだが、1人が好きなわけじゃあない。むしろ、寂しがりな方だ。なら、可能性があるとしたら……………

「多少のことは堪えてでも……………媚を売ってでも関係を続けようとする？」

「おそらくな」

「で、でもちよつと待てよ。俺は桜に何かした覚えはないし……………仮にしていたとしても、いつからしなくなったんだ？」

「それが分からないんだよ。今のお前を見ると、むしろ恨まれるようなことをしたこと自体が不思議だ。」

「……………つまり、無意識のうちに、たった1回だけ、恨まれるような大きなことをしたってことか？」

「おそらくな。……………で、おそらく、その結果がお前の知ってる桜ちゃん。これは俺の見た感じだが……………桜ちゃん、今までお前に反抗……………というか、お前の意見に異見したことがあるか？」

桜が俺に異見？……………そう言われれば、ないと思う。……………

いや、ない。俺が何か言うと、桜はいつも笑顔で『分かりました』と言っていた。喋る内容は友達関係と変わらないけど、常に俺の意見は尊重していた。事実を言い、その事実が俺の言ったことと違うことはあっても、桜自身の意見で俺と違う意見を出したことなどない。

「……………確かに、それが本当なら、口調が変わった前後が分かれば

原因も分かるな」

「だけど、不思議なことが1つある」

「不思議なこと？」

「お前の親と桜の親は、なんで知っていて放置したのかだ」

「！」

そうだ。俺の親はともかく、桜の親が気づかないわけがない。なら、なんでほつといた？それを言えば俺と桜は強制的に離れなくてはならなくなるから？それとも、それほど大きなことだとは思わなかった？……いや、そんなことはないはずだ。口調が変わったのは勿論、俺に対する態度も変わったはずだ。それを不思議に思わないはずがない。知らないはずもない。俺の方に悪いことをした意識がなかったからか？

「とりあえず、そのことは考えても埒があかない。時間もないしなとりあえず、今の口調はいつからだ？」

いつから？桜が言うには、小学校の頃に事は起きた。………いっただ？突然変われば印象に残るはずだ。………けど、俺の記憶では、あったときからあの口調だった気がする。

「分からない。」

「……そうか。なら次だ。子供の頃、怪しい大人と会わなかったか？」

「怪しい大人？どういうことだ？」

「次の文は『後ろめたいことがないならば、前を見て歩け。もし非があると思うなら、その頭を下げ過去を悔い改めよ』だ。今までも恨みがある人を殺したが、今のところ何かしら犯罪に関わったかは分かっていない。けど、今回はおそらく、誰が見ても後ろめたいこと、つまり、犯罪に関わっていたことだと思う。小学生がそんなことをして平然としてるわけがないから、大人だ。」

そう言われると、そうも考えられる文だ。

「そうか。でも、文的には『謝れば許す』とも取れないか？」

「ああ。だから、もしかしたら犯した罪は小さいかもしれない。……」

…けど、もしかしたら、『悔いてるなら多少は楽に殺す』という意味かもしれない。間接的に被害を与えたとか。」

「なるほど。桜は殺すと言ってるから、たぶん後者だな。でも、そんな奴、どうやって探すんだ？間接的じゃあ、見つけようがないだろ。」

「そうでもない。さつき、俺は『怪しい男と会わなかったか？』と聞いたけど、それはない。」

「なんで？」

「会って、被害を受けたなら、直接だ。間接的ってのは、元々被害が及ぶはずのない者が受けた場合だ。」

「それでも、見つける方法なんてあるのか？」

「間接的に被害を受けることなんてたかが知れてる。それを行ったのが大人なら余計にな。」

「どんながあるんだ？というか、本当にあるのか？」

「……………1つだけ、小学校の頃に起きたことがある。この町……いや、もしかしたら、この国の人全員に影響を与えたかもしれない」「そ、そんなことがあるのか？」

何かあっただろうか？全員が影響を受ける。つまり、俺も受けたということだ。……………何かあったか？

「不法な核実験による地震」

「地震？」

覚えがない。……………いつだ？小さな地震ぐらいは経験があるが、不法な核実験なんて聞いたことがない。

「やつぱりな。……………つまり、お前の中から消えているのは小学3年生の頃だ。」

小学3年生？……………いや、そんなはずはない。はっきりとは思いつけないけど、確かに3年生のときの記憶はある。桜と違うクラスになって、いつも桜が俺のクラスに遊びに来ていたのを覚えている

「その顔だと、3年の記憶はあるみたいだけど、何も全部がないわけじゃない。事が起こった前後……………もしくは、事件のことだけでも

覚えてない可能性があるからな。」

「……仮に3年生のときに何かあったとしても、地震だけで恨みをもつようになるのか？」

「地震だけじゃない。おそらく、火事もだ。」

「火事？」

「ああ。昔は4人しか殺したい人がいなかったということと、桜の性格を考えれば、全部が同時に起こったと考えるべきだ。そして、第一の殺人は火災。」

なるほど。火事の時に地震。他にも3つ。今日から3日分も同時に起こったということか。

「じゃあ、早くその核実験をした人を探そう。誰なんだ？知ってるんだろ？」

俺がそう言っただけで立ち上がるが、しかし良は立ち上がらなかった。

「どうしたんだ？まさか知らないのか？」

「いや……知ってる」

「なら……！」

「ある国の首相だ。……けど、そんなのどうやって場所を調べるんだ？」

絶望的状况に直面したように、良は声を絞り出すように言った。

確かに無理だ。……けど、どうやって桜は場所を特定したんだ？そう思ったとき、数日前のことを思い出した

「……なあ、良」

「なんだ？」

「もしかしたら、分かるかもしれない。」

「どうということだ？」

俺は桜と始業式にした話を良に話し、すぐにその人で合ってることを確認すると、泊まってるホテルを調べ始めた。

「どのホテルか分かったぞ！」

「ホントか！？」

「ああ。30分ほどで着く」

今の時間は17時30分。ギリギリか。

「……けど、これでもし間違ってたかどうかするんだ？」

「マイナスに考えるな、快。プラスに考えろ。」

良は俺の言葉にそう返事をする、サッサと玄関へ走り出した。俺も後を追って、走り出した。

止まらない

目的のホテルに着くと、すぐに中に入り、目的の人物の部屋をフロントで聞いた。……しかし

「いいえ。そのような人はこのホテルには泊まっていません」

「そんな！もう一度確認してください！」

返ってきたのは、その人物すらないという返事だった。俺はすぐにもう一度確認するよう言ったが、同じ返事が返ってきた

「良。どういふことなんだ！？」

「おそらく偽名で泊まってるとしたか……」

それじゃあ探しようがない。

「快。一旦外に出よう。」

「でも、もうすぐ時間だ。いつ殺されるか分からないんだぞ？」

流石に小さな声で良にそう言ったが、良はそのままホテルを出て行った。俺も仕方なく後についていくと、良は周りをキョロキョロしだした。

「どうしたんだ？」

「もし俺が誰かを殺すとき、理想的なのは遠距離から誰もいないときにライフルでも撃つことだ。」

「どうしたんだ？急に」

突然、良が意味の分からないことを言い出した。

「今の時代、ライフルなんて簡単に手に入るが、問題は他にもいくつもある。『居場所』『周りの人物』『地形』そして何より、桜の場合は『殺し方』」

確かに。このホテルの周りの建物は高い。ホテル自体も高いけど、遠くから撃とうなんて考えれば、相手が最上階辺りにいないと無理だ。それに、いくらなんでも事前にどこに泊まるのか調べて、盗聴器なんかを仕掛けるのも無理だ。

「殺し方については不確かだが、恨みが地震ということなら、おそ

らく落石、落盤。ホテル自体を揺らしたりするのは無理だから、おそらく――」

「外に出たときを狙って何かを落とす？」

俺は良の言葉の途中でそう言った。

「そういうことだ。」

「でも、それじゃあどこを見てればいいんだ？この辺りは高い建物があるんだから、桜にとってはどこでもいいわけだから、数が多すぎる。」

「たぶん大丈夫だ。ここから神社までの道と人が少ない場所を考えれば、たぶんそこに桜がいる」

「じゃあ急ごう。ここから神社までの最短ルートはこっちだ」

俺は神社の方向へ走りだし、人気のない場所を探した。周りにはホテルやビルなどが沢山あり、とても人気がないとはいえない。むしろ人が多い。

「おい。本当に人気のない所なんてあるのか？」

「分からない。けど、人が沢山いるなかで重たい物を落とせば、嫌でも見つかるだろう！」

それもそうだが、人気がありすぎる。本当にあるの――

「！」

「どうしたんだ？」

急に止まった俺を不思議そうに見ながら、良が聞いてきた。

「桜がいた！」

「何！？」

俺はそれだけを言うと、すぐに桜のいた方に走り出した。桜はすぐに角を曲がって見えなくなったが、確かに裏路地へ入っていった。「確かに裏路地なら人気はないけど、仮にも首相ともあるう人が裏路地なんかに来るのか？」

「分からないけど、確かに桜が入って行ったんだ」

桜の消えた路地を曲がると、今度は桜かどうか見分けれるほどはつきりとは見えなかったけど、再び角を曲がっていた。それから何

度も角を曲がり、ついには廃ビルに入ってしまった

「なあ、何かおかしくないか？」

「何が？」

桜に続いて廃ビルに入ろうとすると、良が突然、そんなことを言い出し、俺を止めた

「追うのに必死で気づかなかったけど、おかしすぎる」

「だから何がだよ。はやく止めないとやばいんだぞ」

「分かってる。……けど、さっきから桜が見えた時の姿勢を見てると、走ってるように見えないんだ。」

「それがどうしたって言うんだよ。」

「分からないのか？桜が歩いてるなら、俺たちはなんで走って追いつけないんだ？」

……言われればそうだ。ずっと走って追いかけてるのに、全然追いつけない。それどころか、今思えば、なんでいつもギリギリで見えなくなるところを見るんだ？都合が良すぎる

「何かの罠の可能性がある。」

「……でも、だからって、このまま放っておくわけにもいかないだろう？」

「分かってる。……けど、気は引き締めておけよ？」

「……ああ。」

まさか、桜相手に会うためだけに怪しんだり、注意しておくなんておかしいと思いがちながらも、今の桜は普通じゃないと思え、むしろ集中できた。

桜の階段を上る音を頼りに、音を立てないように階段を上っていると、とうとう屋上まで来た。俺と良は気づかれないように隠れながら、ドアの外を見た。そこには確かに桜がいて、こちらに背中を向けて屋上から下を見ていた。

「……どうする？ソツとよって、とりおさえるか？」

「………それしかないだろう。」

俺はそう返事をする、ゆっくり慎重に歩き出した。音を立てな

いように、足元にある鉄くず、石などを蹴らないように。

「来たんだ？」

「！」

後ろでも俺と同じように良の体が跳ねたのが分かった。そして、俺はそれと同時に近くにあった石を蹴ってしまった。石は音を立てて桜の方に転がっていき、桜はそれを拾った。

「見つからないようにつけるなら、もっと上手くやらないと。」

「……いつから気づいてたんだ？」

俺は観念して桜にそう聞いた。良もドアの影から出てきて、俺の横に並んだ。

「初めから。……というか、わざと見つかって、ここに連れて来たんだから」

「やっぱり罠か」

良が隣で苦々しそうにそう言った。

「罠でもなんでも、桜を止めるさ。」

「無理だよ。」

桜はそういいながら、顔をこっちへ向けた。その顔は数時間前と同じくらい無表情で、初めてその顔を見たときと同じくらい、桜とは別人なんじゃないかと思えた。

「無理かどうかはやってみないと分からないだろ？」

「分かるよ。後をつけられたなら可能性はあるけど、後をつけさせたんだから。」

「それでも、今ここでお前を抑えれば止められるだろ？こっちは男2人なんだから。」

そう言つと、桜は呆れたように一度下を向いて――

「勝てるの？」

そう呟いた。いつもの桜なら余裕だが、今は違う。数時間前の桜の家でのことで、今の桜の身体能力を今までの桜と同じと考えたらい

けないことぐらい分かっている。俺1人なら、負けていると思う。できて時間稼ぎ。……でも、今は良がいる。いくら身体能力が高くて片手。同時に攻めれば勝てないわけがない。

「快。お前は右だ。俺は左。」

良も同じ事を考えていたのか、俺にそう指示を出した。

「……分かっていると思うけど、聞こえてるよ?」

桜は親切にもそう言ってくれたが、そんなことは分かっている。けど、聞こえても問題ない。どうせ他に方法なんてないんだから、何かを話した時点で作戦はバレバレ。話さなくて連携を取れないほうが不利だ

「いくぞ!」

良の声と共に、俺は走り出した。桜はそれでも無表情に立ったままで、距離はドンドン小さくなり、良が飛びつこうとした瞬間――
「ぐっ!」

桜が突然、さっき拾った石を良の足へと投げた。ちょうど飛びつこうとした良はバランスを失って倒れてしまい、それに気を取られた俺は急に近づいてきた桜に反応できず、俺もこかされてしまった。
「ね、無理でしょ?」

桜はいつの間にかドアの近くまで行き、近くに合った四角い、大きな石を拾った。

「……それで首相さんを殺すのか?」

「そうだけど?」

当たり所が悪かったのか、良は足を引きずりながら俺の近くまでやってきながら桜にそう聞いた。すると良はしゃがんでいる俺と話せるようにしゃがみ、小声で言った

（快。もう一度同時に攻めるぞ。たぶん、次にアイツはあれを投げない）

（なんで分かるんだ?）

（あれがなくなったら殺せないからだ。だから、たぶん避ける。今度こそ飛びついて抑えるぞ）

良はそう言うと、良は立ち上がり、すぐ走れる準備を始めた。俺も立ち上がり、走れる構えをした

「……また同じ手？」

桜はそう聞いてきたが、俺たちは答えずに、かわりに走り出した。桜は相変わらず立ったままで、近づいてくるのを待っていた。そしてついに、手に持っているものを投げる前に良と俺が飛んだ。捕まえた。そう思った瞬間、桜が後方へジャンプした。元々桜の立っていた位置にジャンプした俺と良はちょうどその位置でぶつかってしまった。

「……終わりだね」

顔を抑えながら桜見上げると、桜はそう言った。そして、そのとき初めて桜の手に持っているものが何なのか分かった。それは石なんかじゃなくて、何かのスイッチだった。そして桜は、迷いなくそのスイッチを押した。

「くっ！」

俺はすぐに起き上がり、桜の手からスイッチをもぎ取った。それはさっきまであんなに難しかったのに、アッサリと取れた。

「もう遅いよ。」

「分からないだろ？見ながら落としたわけじゃないんだか、外れたかもしれないだろ？」

「当たったよ」

何を根拠に言っているのか分からなかったが、不意に桜は自分の左目に手を持っていくと、それを取った。暗さと距離で分からなかったが、そこには携帯電話が貼り付けてあったようで、手には携帯電話が握られていた

「……つまり、それで見ながらスイッチを押して、当たったことも確認したわけか。」

起き上がった良が悔しそうにそう言った。

「そういうこと。だからもう遅いの。」

「ただとお前さえつかまッ！」

そこまで喋ると、桜は突然良に素早く近寄り、俺のときと同じようにお腹を思いつきり殴った。良は呻きながらお腹を押さえ、丸まってしまった。それを呆然と見ていた俺も、俺の方に飛んでくる手に気づけずに、良と同じように殴られた。幸い気を失いはしてないけれど、とても動けるような状態じゃない。そしてそのまま、遠ざかっていく桜を見ているしかできなかった。

推測

ようやく動けるようになったときにはすでに30分がたっており、横になっっている間に遠くからサイレンの音も聞こえた。

「これからどうする？」

良がずっと黙っているの、とうとう俺から話を振った

「……お前はとうするんだ？」

すると、逆に良に聞かれた。今回のことで、桜がこれからも殺すことは分かった。それに、メールのヒントもうまくやれば解けることも分かった。……でも、どうやって止めるんだ？無駄に桜を追って、同じ事を繰り返すより、今すぐこの町から逃げた方がいいんじゃないか？いくら桜でも、それなら追って来れないだろう。……けど、逃げていいのだろうか？別にアニメや漫画の主人公みたいに力ツコつける気はないが、やっぱり桜は大事な友達だ。なら、悪いことをしたなら謝らないといけない。でも、今はどんな悪いことをしたのかが分からない。ならとりあえず止めるしかない。

「俺は桜を探すかな」

とりあえずそう答えた。正直、今回だって良がいたから桜を探せたようなものだ。もし良が諦めるなら、たぶん俺1人では追えないだろう。けど、やっぱり桜に何をしたのか知りたいし、何より死にたくない。……まあ、どっちが重要かと聞かれれば死にたくない方だけだな。

「……じゃあ、俺も手伝うよ」

良も何か迷っていたのか、少し送れてそう言ってきた。

「じゃあ、さっさと次の内容を調べるか。時間があるって言うても、24時間ぐらいしかないんだし、睡眠も取らないといけないからな」

学校はサボるとして、もう夜も遅くなる。睡眠に6時間は必要として、時間は約18時間。とは言っても、こんなのはただの予測。

走り回った分、余計に寝てしまう可能性だって十分に考えられる。なるべく時間は節約していかないと。

「なら、さっさとメール開け。次の文はなんだ？」

起き上がって座った良がそう言って俺をせかした。俺も座って、携帯を取り出し、メールを開いた

泥棒は物を盗むだけ。強盗はもつと大切なものを取っていく。さあ気をつけて、今度は死神が貴方の命を取りに来るよ。

「桜ちゃん、今度のは直球だな。」

「ああ。」

今度の文は誰が見ても相手は明白。泥棒が強盗。……けど。範囲が広すぎる。この世の中……いや、例えこの町で起こった犯行だけを考えたとしても、1日や2日で調べるなんて無理だ。警察に協力を願い出ても、おそらく子供の戯言として処理されるだろうし、信用してもらっても、調べるなんて不可能に近い。

「たぶん、どんな罪を犯したか書いても調べられないと思ったんだろ。」

おそらく、良の言うとおりだ。……どうする。メールの謎を解かずに桜を探すか？いや、余計に無理だ。

「……快。他にヒントか何かはないのか？」

悩んでいると、良がそう聞いてきた。とりあえず、俺だけではなともいえないので、今までのメールを良に見せた。もしかしたら、俺が気づかないだけで、良なら何か気づくかもしれない。

「なあ」

俺は俺でメールを読み返し、なんとかヒントを見つけようとしていたとき、良から声をかけられた

「この『NO NAME』って誰なんだ？」

「それが分からないんだ。内容的に関係あるとも思えるけど、意味が分からない文章だし……」

「この『、』の前後は勿論繋げてみたんだよね？」

「ああ。意味分からない文章になっただけだな」

俺はもう一度繋げて読んでみたが、やはり意味の分からない文になった

「……………。『いえひがっこさすほてるおとすびょういんさすヘル』
「は？どういうことだ？」

「たぶん、そう書いてある。『病院』の前後に『、』がいくつかあるから、たぶん『、』1つで1つ前の語の最初。現に『2日前』の『前』が平仮名だ。『え』が必要だったってことだ。」

「なるほど…………。けど、結局どういうことなんだ？」
「更に『。』で文が1つ終わると考えると『いえひ。がっこさす。ほてるおとす。びょういんさす。へる』」

「…………分らないんだが？」
「これは3つ目の文から考えたことだが、たぶん3つ目は『ホテル、落とす』だと思う。ほら、こう分けると分かりやすい。」

良が携帯で漢字変換した文字を見せてきた。そうしてみると、確かに『ホテル、落とす』だ

「……………待てよ。この文は3つ目で、今回は3回目。……………てことは」

「ああ。たぶん、これ、順番通りに殺す場所、殺し方が書いてあるんだと思う。1つ目は『家、火』2つ目が『がっこ、刺す』。『がっこ』はおそらく『学校』だろう」

「ていうことは次のは『びょういんさす』だから、病院で誰かを刺し殺すってことか！？」

「そういうことになるな。」

「でもちよつと待て。どうやってそんなことするんだ？病院となると、そう簡単に刺し殺したりできないだろう？」

「考えられるとしたら、その相手が入院患者で、その日、手術があり、桜ちゃんが医者に変装して刺し殺す」

良はそう言ったが、自分で言っていてありえないと思ったのか、冗談口調だった。…………けど、本当にそのぐらいしかない。少なくとも

も、殺す時には刃物を見せないといけないので、個室でもなければ他の人に見つかる。かといって、個室の患者なんてそうはいない。

「……快。とりあえず、病院ってことは分かったんだ。この辺りに病院は3つ。その中で個室の患者だけでも調べよう。俺はここそこ。お前はそつちを頼む」

「分かった。じゃあ、俺の部屋で待ち合わせしよう」

考えても仕方がないと判断したのか、良は携帯で地図を出し、そう言った。俺はそれに従い、ビルを降りた。俺と良は決めた病院に向かうため、ビルの下で別れた。

数時間後、すっかり夜も遅くなったが、なんとか個室の患者の名前は教えてもらえた。聞き出すのが大変だったが、とりあえずはなんとかかった。……凄く看護婦さんに怪しまれたけど。

結果、個室の人は3つの病院合わせても4人。

1人目は若い女性。極度の対人恐怖症らしく、病院には無理を言っただ個室にしてもらったらしい。入院理由は骨折。周りには家が沢山ある病院。

2人目は中年の男性。フリーターで、清掃会社のバイトをしていたら落ちたらしい。幸い、骨折で済んだらしいけど、手足が片方ずつ骨折しているらしい。個室の理由は友達が来て騒がしいから。1人目と同じ病院

3人目は中年の男性。個室しか空いていなかったので個室。体中に火傷の跡がある。元極道という噂。一酸化炭素中毒により、最近入院。今は何をしているのか不明。周りが木に囲まれた病院。

4人目は中年の女性。精神的ストレスにより、情緒不安定。過去に刑務所に入っていたこともある。周りに店が沢山ある病院。まとめてみるとこんな感じになった。

「……誰が怪しいと思う？俺はこの中年の女性かな。刑務所に入ってたって言うてたし」

俺はまとめた紙の上に手を置き、女性を指差した。

「俺は………2人目かな」

「？なんでだ？」

「まず1人目はありえないと思う。確かに『若い』と一口で言っても幅は広いが、俺が話を聞いた看護婦も若かった。それも大学を出て2、3年の女性だ。年寄り……とは言わなくても、中年が言ったならまだ分かるが、20代の女性から見てその女性が若かったのなら、よくてその人と同年代。おそらく、1人目は10代だ。だから、年齢的におかしい」

なるほど。確かにそれは言えるかもしれない。もし10代なら、数年前の話となると、強盗なんてやっているとは思えない。

「次に3人目だが、今までの過程から桜ちゃんが恨みを持つに至った状況は『火事』『地震』『何か』『何か』が起きている。つまり、この強盗は不幸にも……というべきかは分からないが、火事の時に現れている。だからこの人かとも思っただが、元極道なら火傷も納得がいく。何より、個室の理由が『たまたま他に部屋がなかったから』だ。いつこの計画を考えたのかは分からないけど、少なくともこの殺人までに3日は経っている予定だ。それまでに部屋が変わらないなんて保証はない。」

4人目は情緒不安定だからだ。短期の入院なら誤魔化せただろうが、彼女はもう15年も入院しているらしい。事件の日には既に入院しているし、そんなにも長期には誤魔化せない。誤魔化せたとしても今はもう誤魔化す理由がない。」

「そうか。……じゃあ、やっぱり2人目か？」

「俺はそう思うけど、まだ3人目の可能性も残っている。」

「え？でも、今ありえないって」

「まず火傷は元極道なら説明が付くというだけで、それは嘘かもしれない。……というより、どんな火傷かは知らないけど、体中にある火傷の傷なんて、そうでも言っておかないと怪しまれる。それから個室。俺たちはずっと『個室で殺される』と考えているが、個室で殺されるとは限らない。何か……その人の癖さえ知っておけば、殺せるってこともある。」

「確かにそうだな。けど、それじゃあどうするんだ？1人目と4人ははないとしても、2人とも違う病院だし、どっちなに絞らないと。」

2人目か3人目か。早く決めないと……時間が無い。

「……仕方ない。今日は寝よう。」

「……分かった」

疲れていることは自覚していたので、考える時間がないといっても、寝れば今よりちゃんと考えれると思い、納得した。どうせ学校を休んで明日も桜を追いかけるので、良には家に泊まってもらった。両親の部屋から布団を持ってきて敷き、俺はベットに入った。……しかし、寝ようと思っても、やっぱり頭から桜のことや、次の標的の人が頭から離れない。2人の入院理由は骨折と一酸化炭素中毒。どちらも意図して起こせる症状ではない。事故に見せかけようとしても、どうしても人も人の手が加えられた跡が残る。それを残さずに骨折や一酸化炭素中毒にできるのか？……いや、出来る。そうだが、あの方法があった！

「良。起きてるか？」

「……ん？……ああ。」

少しウトウトしていたのか、良の眠そうな声が返ってきた

「良。一酸化炭素中毒にする方法があったぞ。」

「何！？」

いきなりそう言われて驚いたのか、大きな声で驚いていた

「どういうことだ？一酸化炭素中毒なんて、密室で火を起こしたりしないと起きないんだぞ？そんなことをしてみろ。絶対に見つかり、見つからなくても死ぬだろう」

「いや、1つだけある。可能性としては低いかもしれないけど、これしかない。第一の殺人の火事を使えば、簡単に状況は作り出せる」

「……確かに作り出せるが、そんなのはやる価値がない。そもそも中毒になる前に逃げ出すかもしれないし、死ぬかもしれない。それになぜそいつがそこにいると断言できる？」

「別にいなくてもいい。縛って監禁して、頃合いを見て連れ出せばいいんだから。」

「だが………そう簡単にできるのか？その方法だと、おそらく桜ちゃんは顔を見られることになる。警察にそのことを言われたときのことを考えてないとも思えない。それに、それならわざわざ連れ出さず1人目と一緒に焼き殺せばいいんじゃないか？」

「だけど、最近に一酸化炭素中毒になることなんてそれ以外にありえない。火傷の跡だってある。それに、2人目の骨折。これをバレずに意図的にやるなんて無理だと思う。」

「それは……確かにそうだが……。」

「まあ、まだ時間はあるからこれから寝て、起きてからまた考えてみるが、もし他に何も思いつかなかったら3人目を見張っていよう」

「……………分かった」

良はまだ納得がいていないようだが、本当に何もなければそっちにかけて方がいいと考えたのか、少し悩んだあと、そう返事をした

惨殺

朝起きると良が下で寝ていた。聞いた話では、良はいつも早起きらしく、俺が起きる頃にはもう起きてると思っていた。俺はとりあえず、良を起こさないように移動し、私服を取り出し、部屋を抜け出した。別に男同士なので気にすることはないのだろうけど、とりあえず着替え中を良に見られるのは嫌だ。良の方も、俺の着替えなど見たくないだろう。と、いうわけで、1階で着替えを済ませた後、何か良のために朝食を用意しようと冷蔵庫を開けたが

「……見事に何も無いな」

肉や魚はあるものの、料理はできない。すぐに食べられるものは数日前に食べた。

「……仕方がない。良自身に作ってもらうか」

正直、客である良に料理をさせるのはどうかと思ったが、食べるのは良だけだし、相手は良なのでいいかとも思えた。

良は9時ごろになると起きてきた。もし授業に出るつもりだったのなら、普通に遅刻だ。

「良、起きたばかりで悪いんだが、すぐに食べられる物がないんだ。もし何か食べるんだったら、肉や魚があるから、自分で調理してくれないか？」

「ん……？ いや……いい……。俺は朝食食べないから……」

良が昨日の夜以上に眠そうな感じで返事をしてくる。なんだか新鮮だ。いつもシャキツとというか、元気な感じなのに……。それに良が朝ごはんを食べないのも驚きだ。そう思っていると、良は俺が何を考えているのか分かったのか、答えてきた

「いや……。俺の両親が朝弱くて、妹が作ってたんだけど、それが不味くてな……。」

俺個人としては、どれだけ不味い料理なのかを食べてみたい気がしたが、口には出さないでおいた。

「じゃあ、もう少し目が覚めるまで待つて、それから今日の事を考えよう」

それから30分ほどボーとした後、今日のことについて考え始めた。しかし、いくら考えてもいい案はでない。2人目と3人目。どちらともハズレではない気がするし、どちらもハズレの気もする。いくら考えても分からず、ついにそろそろ決めないといけない時間になった

「……仕方ない。もう、快が言ったように3人目に的を絞ろう」

これ以上考えても無駄だと考え、良はそう言った。俺も当然それには賛成で、すぐに家を出て病院へ向かった。……しかし、病院に着いてその人のことを聞いたとき、予想外のことが起きた。

「その患者さんなら、数時間前に退院したわよ？」

俺と良は一瞬顔を見合わせた後、良はすぐに走り出した。俺も驚いたが、すぐに良を追った。後ろから看護婦さんに走るなど言われたが、俺と良はかまわず走った。

「どうしたんだ、良!？」

「殺す場所は病院だ。だから、まだこの中にいるはずだ。2手に別れて探そう。全身に火傷の傷がある中年男」

「分かった。」

病院内を走り続けた。エレベーターなど使わずに1階から屋上まで、階段を上がり降りたり。フラフラおぼつかない足取りの老人。骨折して松葉杖を使う青年。ベットで寝る女性。いろいろな人がいる。……けど、全身に火傷の跡がある中年の人なんて見当たらない。

「いたか!？」

一通り全部を見て回った後、良を見つけて話しかけた。その間も探すのをやめない。

「いや、いない!全部見たはずなんだが……」

俺自身も全部見たと思う。意図的に隠れているなら別だが、そうでないなら見つかるはずだ。他に探していない場所なんてない。

「！快、病院の外……周りの森は調べたか？」

「いや、ただただ、そんな場所にいるのか！？起こすのは病院だぞ！？」

「周りの森も病院の敷地内だ。可能性はある。」

「わかった。今から行こう」

他に探す場所もなく、とりあえず病院を出て森に入った。逸れたら不味いので一緒に探し、どんどん森を進んでいく。時間がもうない。もうすぐ時間が来る。そんなとき、声が聞こえた

「ギヤアアアア！」

「っ！悲鳴！？まだ時間はきてないはずだぞ！？」

俺は時間を確認してみると、良の言ったとおりまだ時間は数分ある。この時計は正確なはずだから、間違いはない。

「くっ！急ぐぞ！」

良は更にスピードを上げ、声の方へ走っていった。そして、だんだんと森が開けていき、その先に桜がいるのが見えた

「桜！」

その場所には、木で見えなかったが、桜の視線の先には全身を火傷した中年男性がいて、背中から血が出ていた。そして、桜の手に持っている包丁には血が付いていた

「……来たの」

桜は少し俺たちの方を見た後、またすぐ後に痛さで呻いている男に目を向けた。

「た、助けてくれ！殺される！」

男は立ち上がることも出来ず、ビクビク震えながら俺たちにそう懇願した。けど、俺たち自身も動けなかった。今の桜が、あまりにも怖すぎた。前までの桜はまだ情けとかそういう感情が少しは見えた。……けど、今の桜には何も見えない。ただ自分の腕時計を見て、無表情に時間が来るのを待っている。おそらく、さっき刺したのは何か不都合なことをこの男がしようとしたから。そして、あと1分もすれば、桜は俺たちの前でも容赦なくこの男を刺す

「桜やめろ！この男が何をしたか知らないけど、もう昔のことだろ！？警察に引き渡して、そこで罪を償わせろよ！」

「快は黙ってて。」

俺の言葉に桜はそう答えた。昔の……俺の知っている桜なら絶対にだせないような、……もし自分が殺される対象なら、これから死ぬんだと思えるほどの威圧感と一緒に……そう答えた

「でも……そうだね。もう初めの予定を話すけど、私、初めは何度も何度も死なないようにこの男を刺して、苦しませた拳句に殺すつもりだったけど……快がいるからね。もし貴方が私に何をしたのか覚えてたら、一刺しで殺した挙げる。」

「なっ！」

結局、桜はこの男を殺すのをやめるなんて考えはなく、淡々とそう言った。

「覚えてる？貴方が私に……私たちに何をしたのか」

「は……え……あ……」

「あと30秒あげる」

男は意味が分からず、ただ驚くだけだが、桜はそんなことにかまわず、時計で30秒を測り始めた。その間も男はようやく自分がどうなるか理解したのか、一生懸命思い出し始めた。

「30秒」

しかし、男は何も思い出せないまま、30秒が過ぎた。男はその言葉を聞いた瞬間には立ち上がり、桜とは反対方向へ走り出した。しかし、桜は慌てることなどせず、その手に持っていた包丁を……投げた。その包丁はまるで吸い込まれるように男の背中に向かっていき、ごく自然に、当たり前であるかのように刺さり、男は突然の痛みに呻きながら倒れた。

「ね、快。彼は自分が何をしたのかすら覚えてないの。」

普段の桜なら確実におびえているであろう状況の男を前に、桜は既に分かりきっていたように、無表情にそう言った。桜はそのまま男に近づくと背中から包丁を抜き、また刺した。そして抜き、また

刺す。それを何度も繰り返した。俺と良は呆然と見ているしかできず、桜が立ち上がった頃には既に数分前から呻き声すらでず、人でさえないような声を出していた人が転がっていた。桜は最後の止めのように立った状態から首に包丁を落とし男の首に包丁を刺した。「じゃあね」

そして桜は終わると、俺たちの方へ歩いてきて、俺の横を通るときにそれだけを言って、歩いて行ってしまった。俺たちはそこで起こったことが現実離れしていて、少しの間動けなかった。分かっていたことなのに、『今まで知っていた桜が容赦なく人を殺す』その現場を見たか見てないかの差なのに、震えが止まらなかった。あと一回。その後には自分もああなるかもしれない。初めは助けると叫び、次第に意味のない叫びに変わって、その後には人でさえないような叫びに変わり、殺される。今、目の前にいる首に包丁が刺さった男のように……

「大丈夫か？快。」

心配した良にそう声をかけられたが、返事ができなかった。今口を開けば吐いてしまいそうだった。俺は口を押さえながら、ゆっくりと男に背中を向けて、病院の方へ歩き出した。良も後から付いてきたが、結局喋れるようになったのは2時間後だった。

忘れていた過去

「……快、これからどうする?」

「どうするって?」

だいぶ楽になったところ、良にそう聞かれた

「正直、桜ちゃんがあそこまでやるとは思わなかった。」

それは分かる。だからこそ、あれから震えが止まらなかったし、吐きそうにもなった。……でも、どうするとはどういうことだろう

「快。もし怖いなら、もうこの町から出よう。お前の親だって、初めはお前を連れて行きたがってたのにお前がここに留まるって言うたから留まらせてくれたんだろ? だったら、親について行けばこの町から出られる。」

……本当にそれで安全なのだろうか? 今日の桜を見ると、例えば地球の反対側にいたとしても安全には思えない。それに……

「いや、ここにいる。」

「快……。」

「怖いし、死ぬのは嫌だけど、やっぱり桜には謝りたいんだ。」

「……そうか」

なるべく怯えていないように気をつけながら良にそう言うと、良は諦めたように言った。

「じゃあ、そのやる気があるうちに最後の殺人を止めるか。次はゴールは近い。早く見つけてご覧。奪う命はあと2つ。次は裏切り者。お金は大切。でも、絶対のものではない。お金に眩んだその目はいらない目 だな」

おそらく、良は俺の強がり気づいているけど、何も言わないでくれた。

「これはまた怖い文だな」

文の意味的に、たぶん目を取られる。

「今度も泥棒ってことか……」

たぶんそうだろう。『お金に目が眩んだ』ということは、騙し取ったりしたということだ。

「……でも、小学生の俺や桜からお金を騙し取ることなんてできるのか？確か、俺も桜も小遣いは中学生から貰い始めたはずだけど……」

「それが問題だな。そもそも、金があつても人見知りの桜ちゃんが金を渡すわけがないし、小学生の快が知らない人に会った時、桜ちゃんを守るためにその相手に賄賂として金を渡すなんてことをするとは思えない。」

ならどうやって金を騙し取る？本人から直接が無理なら間接的に取るしかない。……でも、どうやって？

「……なあ。例の【NO NAME】のメールのヒントはどうだ？」
「たぶん駄目だな」

良はそう言いながら、解読した文が書いてある紙を見せてくれた。今までのところを抜き取ると『ヘル』としか書かれていない

「ヘルって……地獄ってことか？」

「まあ、そうなるな。でも、それって相手は死人ってことになる。いくらなんでも死人を殺すなんて無理だ。」

確かに、それは無理だ。じゃあ、相手は生きていることになる。それなら『ヘル』の意味は？これまで『場所・殺し方』の順に書かれていたのに、最後は場所のみ。それもありえない場所。何か、他にも見逃しているヒントがあるのか？俺は携帯で元の文章を開いて何度も見返した

今、私は貴方とグラッジが2日まえ、の夜に始めて貴方にメールをしたことしか知らない人、グラッジは明日から人を殺す。が、回数は6回つ、いに最後に死ぬのは快誰か止めてこ、のは人を殺、人す、る。本、当に天、に祈る、お、父、さんお母さん救、って。病、院、へ来てさ、あす、ぐに。人。へ、ル、

『、』の1つ前の文字の先頭を読み、『。』で1つの文が終わる。……駄目だ。何もヒントがない。このメールに全部が書いてあるは

ずだ。まだ見つけていないヒントがあるはずだ。何か……

「……良。思っただが、この文、最後の『ヘル』は続きがあるんじゃないか？」

ふと、そう思った

「え？」

「ほら。最後は『。』で終わっていない。」

「ああ。そのことか。俺も考えはしたが、この辺りに『ヘル』が付く場所なんてない。……というか、その名前が付く場所なんて聞いたことすらない。」

気づいてるなら言っただけだった……。けど、確かにそんな場所は聞いたことがない。ヘル……。英語にすればあるのかもしれないが、ここまで途中から無茶苦茶な文になっても続いてきたのに、いきなり英語にするとは思えない。いくらでも無茶苦茶な文にして、日本語にするはず。ということは……。場所じゃ……。ない……。？

ヘルの前に『人』。これはなんで『。』で囲まれてるんだ？……まさか『ヘル』って……

「良。……これ、『ヘルパー』なんじゃないか？」

「は？」

「ほら。ヘルの前に人が『。』で囲まれてる。ヘルで続く単語は人の職業を表すんじゃないか？」

「……確かに……。だけど、ヘルパーがなんで泥棒と関係があるんだ？」

「それは……」

ヘルパーは介護とほとんど同じようなもの。なら、そのヘルパーがどう関係あるんだ？……。ヘルパー。なんだ？何か引かかるヘルパー。ヘルパー。……。どこかにヘルパーの知り合いなんていたか？

「どうしたんだ？」

「いや……」

心配 そくに良が聞いてくるが、気にしていられない。何かを思い

出しそうだ……。これを思い出せたら、俺が桜に恨まれる原因が分かるかもしれない。……でも、昔の人見知りの桜がヘルパーと関わりがあるはずがない。……そういえば、俺はあることを思い出し、両親の部屋へ行った

「おい、勝手に漁っていいのかよ」

俺はそこである物を探すために、そこらじゅうを漁った。昼が過ぎて、探し回った。そして、とうとう、奥の方から長方形の鍵がついた箱を見つけた。

「なんだ？それ」

「昔、父さんが見てたんだ。何かなって聞いてみたら、『お前は知らなくていい』って言われたんだ。見たところ何かの書類みたいだったけど、もし俺の違和感が正しかったら、この家にはヘルパーがいたと思う。」

昔から家を開けがちだったうえに心配性な両親が俺だけを置いて行くはずが無い。俺は箱を開けようと無理矢理何度も引つ張ってみた。けど、開く気配はなく、凄く頑丈に作られていた

「相当硬い作りだな。箱自体も金属で出来てるし、鍵がないと開かないようになってる。よっぽどお前に見せたくないものらしいな。」

例え父さんが見せたくないものでも、俺は見ないといけない。この中に入ってるのは見当違いのものかもしれないけど、見てみるまで可能性はある

「良。何か開ける方法はないか？」

「そう言われても……。もう、鍵をなんとか破壊するしかないだろう。」

俺は急いで小さなハンマーを持ってきた

「そんなハンマーで壊せるのか？」

「大きければいいってもんじゃない。このぐらいなら外すことなく叩ける。抑えてくれ」

良は箱を抑えると、俺は鍵に向けて思いっきりハンマーを叩き付けた

ガン！

それを何度も何度も繰り返す

ガン！ガン！ガン！ガン！

しかし、一向に壊れる気配などない。どれだけ丈夫なのか分からないけど、相当丈夫なものだ。それでも何度も何度も叩きつけ、数十分後、ようやく壊れた。

「やっと開いたな。……中に何が入ってるんだ？」

俺は予想通りに入っていた何かの書類を取り上げ、見てみた

採用書

氏名 橘 葵

性別 女性

年齢 46歳

他にも電話番号や住所などが書かれていたが、俺は顔写真で思い出した

「この人……確かに俺の家に来てた……」

「何！？」

よくは覚えてないけど、確かにこの人は来ていた。家を開けがちなだった両親の変わりに夕飯を作りに来てくれていた人。俺と……桜の分を作ってくれていた。

「ちよつと待て。この人がこの家のヘルパーだったことは分かったけど、なんでお前の親はこれをお前に見せなくなかったんだ？それに泥棒つてのも納得がいかない。」

そうだ。なんでこの人は泥棒なんだ？俺の家に金目の物なんてない。ヘルパーを雇えるくらいだから、多少は金持ちの部類なんだろう。……けど、この部屋を見渡したって、金目の物なんてない。……それとも、昔はあったのか？……今は考えても仕方がないか

「とりあえず、人は分かったんだ。すぐに探そう。」

「けど、どうやって探すんだ？」

どうやって……。そういえば、なぜ父さんはこの書類を持ってるんだ？もしかして、父さんはずっと探していた？ならどうやって探

し出す？

「……………この人、俺の家の近所の真田さんじゃないか？」

考え込んでいると、良がそう口にした。

「真田さん？でも、この人の苗字は橘だぞ？」

「ああ。……けど、似てるんだよ。近所付き合いとく凄くいいから、よく覚えてる。特にほら。この絵の鼻の横にあるホクロ。珍しいからよく覚えてるんだ」

見てみると、確かにホクロがある。……けど、そんな人は探せばいるし、何より名前が違う。

「……よし。ならこうしないか？今から真田さんに会いに行く。その時、後ろから『こんにちは、橘さん。俺のこと、覚えてます？』と言って、反応があれば当たりってことだ。」

そんな簡単なことで分かるのだろうか？……けど、やらないよりはかはマシだな。そう決めると、俺と良は出かける準備をして、真田さんを探しに行った。真田さんは簡単に見つかり、近所の人と話をしていた。遠目からでも、真田さんは確かに橘さんに似ていた。写真より老け顔だが、8年も経っているの、本人なら写真よりは老けていて当然だ。少し見ていると、真田さんは話を終えたのか、他の人とは反対方向に歩き出した。俺たちは気づかれないように後をつけながら、周りに人がいないことを確認すると、行動に出た。

「こんにちは、橘さん」

なるべく不自然にならないように、気軽にそう声をかけた。そもそも、俺自身は成功するとは思っていなかった。……けど、真田さんの反応は予想外だった

「え！？」

その声は知られたくないことを不意打ちで知られた時のような驚いた声で、振り向いた顔は鬼でも見るかのように、恐怖に染まっていた

「あ……ああ……まさか……深峰さんの所の……」

まだ何かを勘違いしている可能性はあったけど、俺は確信した。

この人は俺を知っている。

「っ！」

突如、真田さんは反転したかと思うと、走り出した。俺はその行動に驚いたが、すぐに追いかけた。真田さんの足は50代とは思えないほど速く、なかなか距離は縮まらない。それに、角を曲がるばかりするので、向こうが有利過ぎる。何度も良が先回りして捕まえようとしたが、そのたびに逃げ回り、なかなか捕まえられなかった。しかし、それもついに終わった。いくら追いつけなくても相手は50代10代の俺と良の2人で追いかけてたら、いつかは疲れる。真田さんは諦めたように止まった。その場所は回りに誰も来ないようなビルに囲まれた場所で、2回前の事件の時に通ったような所だった。

「橘葵さんですね？」

俺は念のためにそう確認した。真田さん……もとい橘さんは観念したのか、息を荒くしながらも認めた

「……………」

しかし、ここまで来て俺は何も言葉が見つからなかった。そもそも、ヘルパーさんを見つけて何をすればいいんだ？次に殺されるのはおそらくこの人。なら、桜に殺されることを言えいいのか？それとも、強盗の件について責めればいいのか？

「……貴女は、昔、俺の家のヘルパーさんでしたよね？」

出てきたのは確認の言葉だった。もうこの人しか昔のことを思い出す手がかりはない。まだ時間もある。なら、この人から聞けることを全部聞かないと

「……そうよ。8年前まで、貴方と天野さんの所の娘さん……確か桜ちゃん？その子の夕飯を作るために通ってたわ」

やっぱり、俺の家には8年前までヘルパーさんが来ていた。……

それも、桜の分の夕飯も作っていた。

「……なら、8年前に何があったか覚えてますか？」

「別に教えてあげてもいいわ。……けど、その前に私も聞きたいこ

とがあるわ」

「なんですか？」

「最近の殺人事件。……あれ、全部貴方がやってるの？」

なぜそんなことを聞くのだろうか？……もしかして、桜に狙われてることを知ってる？

「……いいえ、違います。犯人は桜です」

「そう……あの娘が」

「……で、教えてくれますか？」

「……ええ。いいわよ。……ところで、貴方はどこまで覚えてるの？」

「……何も知りません。」

言ってて虚しくなる。自分のことなのに、何も知らない。

「何も知らないのになんで私が分かったの？」

俺の返事は予想外だったようで、橘さんは驚いていた。俺は桜から送られたメールや桜と話したことを話した。橘さんは納得したようで、立っているのも疲れたのか、下が地面なのも気にせずに座り込んだ

「まず、最初に火事で殺された人。昨日殺された人。私は知り合いなの。残念ながら他は知らないけど。……昔ね。あるお金持ちの……そう、貴方の家に泥棒に入る計画をたてたの。」

橘さんの言う計画は簡単だった。

初めは、まず家に火を付ける。その後、金目の物を取る。火をつけるのは、子供を逃がして、見られないようにするためらしい。

……けど、たまたまヘルパーの仕事をしていた橘さんにその家からヘルパーの依頼が来た。3人は喜び、さっそく橘さんを送り込み、毎回、こっそり家から金目の物を盗ませようとした。……しかし、元々子供が好きでヘルパーになった橘さん（元の計画で子供を逃がすのはこの人の案らしい）は俺と桜……特に橘さんは小さい女の子が好きならしく、桜を気に入る、盗もうなんて気がしなくなった。だから他の2人に『金目の物はない』と言い、泥棒を止めさせよう

としたが……橘さんは裏切り者とされ、他の2人だけで元の計画を実行することになった。

「……そうだったのか。……それで、その後はどうなったんですか？」

「……この先は2人の愚痴から推測することになるけど……」

橘さんの推測によると、子供を逃がす気がない2人は、火を付けずにそのまま1人が強盗に入り、1人は見張り。1人が家に入って数分後、地震が起きたらしい。凄じ揺れで、地震が収まった時、橘さんの裏切りもあったせいかイライラしていた外の見張りは、まだ中に仲間がいるのも気にせず家に火を付けたらしい。中の1人は驚いたらしいが、金目の物が見つけれてないまま出るわけにもいかず、探していたところ、男の子……つまり俺と気絶している桜にあったらしく、俺に金目の物のありかを吐かせようと近づいた瞬間、錯乱していた俺は咄嗟にその男を近くにあった包丁で刺したらしい。驚いた男は俺を振り払い逃げようとしたが、子供にそんなことされるとは思っていなかったらしく、腰を抜かしてしまったらしい。そのすぐあと、後ろで気絶していた桜が起きて、俺の体を掴んで何かを言おうとした瞬間……俺が桜を叫びながら刺したらしい。そして瓦礫に押し付け、何度も何度も刺している間に、男は今なら逃げれると思いい、逃げたらしい。

「……そうだったのか……」

「その後、なんとか隠れ家から逃げた私は貴方たちが気になって家に行くと、家が燃えてたの。……そして罪滅ぼしにと家に飛び込み2人を助けたの。」

橘さんはそう言いながら、長袖だった袖を捲くると、下には火傷の跡が続いていた。もしかしたら、全身に火傷の跡があるのかもしれない。

「……これで全部」

橘さんは満足したようにそう呟くと、ゆっくり立ち上がった

「……どうするんですか？今の話を聞いた限りだと、そこまで罪は

重くないんじゃないですか？謝れば、桜も許してくれるんじゃないですか？」

今の話が本当なら、この人は命の恩人ということになる。それなら、桜だつて殺さないかもしれない。

「いいえ。」

けど、橘さんの考えは違った。

「桜ちゃんはね、このことを知ってるの」

「なっ！」

「貴方と桜ちゃんが入院してる時にね、2人の親には合わせる顔がなかったけど、2人には謝らないと思って、会いに行ったの。貴方には会えなかったけど、桜ちゃんには会えたわ。桜ちゃんに火事のこともなんか話したとき……こういう顔をしたと思う？」

……予想できなかった。昔の大人しかった桜がそのことを聞いたとき、どういう行動に出るのか。もし、今の俺の状況で聞いたら、笑って『いいえ。貴方は命の恩人です』と言えたのかもしれない。……けど、昔の信頼していたヘルパーさんに裏切られた桜の気持ちは分からなかった

「桜ちゃんはね、話したとき、放心状態……というより、本当に魂が抜けたような感じだったの。それに耐え切れなくなった私はそこから抜け出して、二度と会いには行けなかったの」

橘さんは、まるでそれを悔いるかのように言った。もし、そこで桜に何か言ったり、毎日通ったりすれば、まだマシな結果だったのだろうか？

「だから、私は桜ちゃんに殺されてもいいの。……むしろ、ずっと会ってなかったからどんな風に成長してるのか楽しみだわ。さっきは貴方から逃げてしまったけど、成長した貴方に会えたことや謝れたことが嬉しいわ。」

橘さんは笑いながらそう言った。……けど、俺は納得できなかった
「そんな！命を助けておいて、その助けた人から殺されるなんておかしいですよ！」

「快君。大人が大人を騙すのと、大人が子供を騙すのは違うの。子供は傷つきやすいの。そして、その傷はなかなか直らないもの。昔……その傷を直す努力さえしなかった私へのこれは罰なの。」

橘さんは俺にそう諭すように言うと、時計を見た。

「もうすぐ6時。そろそろ桜ちゃんはくるかしら」

そして、橘さんがそう言った直後、足音が聞こえてきた。まるで初めからここにいたことが分かっていたかのように。……いや、もしかしたら、ずっと追ってきていたのかもしれない。

「こんにちは、桜ちゃん。大きくなったね」

「こんにちは、橘さん」

笑顔で挨拶をする橘さんとは対象に、桜は冷たい目を向けた。

「こら。駄目でしょ？ せっかく可愛く育ったのに、そんな無愛想な顔しちゃ。」

橘さんは叱っているのに、その顔は楽しそうだった。どんな形でも、大きくなった桜に会えたのは嬉しいのだろう

「……もうすぐ、この無愛想な顔もなくなりますよ」

「そう。……けど、年寄りをあんまり甘く見ないほうがいいわよ。桜ちゃんにはそんなことはできない。」

「……私には殺せないって言うんですか？」

橘さんの言葉で、桜の目が更にキツくなった。でも、さっきまでの橘さんの運動神経なら、逃げることもただけならできそうなのも確か。さっきは2人で追いかけたけど、今度は桜1人。逃げられないこともない。

「そうよ。」

橘さんがそう言った瞬間、桜は飛びつこうとした。……だが、そんなことをすれば避けられるのを分かっているのか、すぐにその動作をやめた。そんななかでも橘さんは余裕そうで、桜が飛びつこうとしたにも関わらず、初めから飛びつこうとしないと分かっていたように動かなかった。

「別に桜ちゃんが私を殺せないとは言っていないわよ。」

「……どうということ？」

「ん？それを快君の前で言っているのかしら？」

「どうということだろうか？俺の前で言えないこと？見てみると、桜も迷っているらしく、考え込んでいた。そして出した結論は

「いえ。止めておきます。」

桜は橘さんが何を言いたいのか分かったのだろうか？

「そう。……けど、その結末はお勧めしたくないわね。世の中ハッピーエンドじゃないと。」

「……いいえ。無理矢理にでも実行します。」

「ふゝ。仕方ないわね。年寄りが言えることじゃないし。3人に任せようかしら」

橘さんは諦めたようにそう言うと、「さて」と話を変えた

「桜ちゃんも暇じゃないんでしょ？さっさとやってね。……ああ。

快君と良君。2人は見ない方がいいわね。子供に見せられる状況じゃあないから。」

桜もそれが分かってるのか、目でどこかへ行くよう合図している。

……けど、俺は離れる前に説得したい

「桜！この人が命の恩人なのは知ってるだろ？それでも殺すのかよ！」

「知ってるよ。……けど、許せないの。結果はどうであれ、お金のために動いたことが」

「けど……！ちゃんと改心してるじゃないか！」

「失礼だとは思ったけど、さっきまでの話、全部聞いてたの。それで、橘さんが言ったように子供の頃の傷はなかなか直らないの。別に言い訳をするわけじゃないけど、殺しでもしないとこの気持ちはもう落ち着かないの。何度も何度も殺そうと思って、私が出てきてそのたびにいろいろな方法で落ち着かせてきた。……けど、もう無理なの。殺したい人が全員この町に集まった状況。殺せる状況」

桜が今までどれだけ我慢してきたかは分からないけど、無表情から諦めたような目で俺を見てくる顔からは、それまでの苦勞がよく

分かった。

「だからごめんね」

桜はそう言っと、橘さんに近づいていく。

「快君。良君。早くここから離れなさい。子供が見るには過激すぎるから」

やっぱり橘さんは笑いながらそう言った。俺も良もその忠告に従い、橘さんに背を向けて、走った。何分経っても後ろから悲鳴なんて聞こえなかったけど、おそらく桜は橘さんを殺しただろう。

希望を抱いて

いつの間にか家に帰ってきていた。裏路地から出た後、良と一度別れ、当てもなく歩いていたはずなのに、家に着いていた。自分が殺されるまで後、約22時間。ここまで全員殺されてきたのに、ここまで来て実感がない。明日の午後6時。桜は俺の目の前に現れて殺す。……俺はどうすればいいのだろうか？武装して戦う？あるのは包丁が数本。良と組んで、死ぬ気になって戦えば勝てるかもしれない。……けど、それは違う気がする。俺が全部忘れてる間、桜は苦しんでいた。だからって橘さんみたいに笑いながら殺される度胸もない。殺すか、殺されるか。結局はどっちかしかない。どっちが正解なのか。それとも、どっちも正解じゃないのか。……例えば俺が桜を殺したとしよう。たぶん、その後の人生は虚しいだけだ。桜を殺したことへの罪の意識。桜がいない虚無感。桜のいた席を見ては桜のことを思い出し。朝起きて台所に行けば桜がいたことを思い出す。永遠に桜のことを悔やみ、悲しむだろう

なら殺されるか？それは嫌だった。単なる我侭だけど、殺されるのは嫌だった。……どうすればいいんだ、俺は。殺されるのがいいのか？殺すのがいいのか？桜の気持ちを考えると、どっちがいいんだ？俺の気持ちは？いくら考えても分からない。そういえば、もしこれで良と会わないまま死んだら良はどう思うのだろうか、なんてことも考えてしまった。俺はなんとなくアルバムを取り出した。取り出した後に『これじゃあまるで死ぬ気でいるみたいだ』と思ったが、気にせずに開いた。アルバムを見ると、桜や俺が笑っている写真が何枚もあった。……けど、今の桜を見てしまっていると、この笑顔さえ、作り物な気がした。

気づくと深夜だった。いったい、何時間アルバムを見ていたのか分からない。自分の周りには沢山のアルバムがある。何度も何度も見直したアルバム。そのたびにその頃を思い出した。……そうして

俺は、なんとなくだけど、決意した。どちらを選ぶかが決まった。

良に連絡……はしなくていいか。なんとなく、良はどんな結末でも受け入れてくれる気がする。案外、どうするか決まると心が落ち着き、逆に睡眠欲や食欲がでてきた。俺は財布を持って外へ行き、コンビニで弁当を2つ買った。家に帰ると1つを冷蔵庫に入れ1つを食べた後、風呂に入った。そしてベットに入った。そしてそのとき、ようやく、橘さんが言っていたことが分かった。桜はおそらく、俺を殺せない。子供の頃の傷はなかなか消えないけど、それは傷だけじゃない。ずっと恨みを我慢していたのも、俺だけは殺したくないからだ。……だから、あのとき桜は自分に言い聞かせるために無理矢理にでも橘さんの望まない終わり……俺が死ぬ終わりにすると言っただ。逃げるチャンスがいくらでもあったのも、いくら恨んでも殺したくないからだ。それが分かると、さっきなんとなく決心していた思いが確かな思いに変わった。そして、あとは何も悩むことなく眠った。

起きたときには昼を過ぎていた。……けど、慌てる必要はない。

やることは決まっている。俺は冷蔵庫から弁当を取り出し、暖めたそれをいつも以上に味わうように食べ、歯を磨き、髪にクシを通した。どうなっても桜と会うのは最後なんだから、キチツとした格好でいたかった。家から出るつもりはないのに外行きのまともな服に着替え、時間が来るまでゆっくりアルバムを見て待った。

6時。インターホンがなった。桜のことだからドアを蹴破って入ってくることはないと予想していたので、慌てることなくドアを開けた

「いらっしやい。上がるか？」

ドアの向こうには悲しそうな顔をした桜がいた。俺はその桜に対して、笑顔で対応した。桜は返事をせず、ただ頷くだけだった。俺は入り口からどけて、桜が入れるようにした。桜はゆっくり家に入り、俺はドアを閉めた。

「何か飲むか？」

「……いい」

桜は小さく返事をした。俺も「そうか」とだけ言った。桜は席につかず、俺が広げていたアルバムを見ていた

「懐かしいだろ」

「うん」

「お前が生まれたのが3年生の頃なんだろう？」

「うん」

「アルバム見直してさ。1年の頃から最近まで全部見たけど、全く差が分からなくて、今まで桜を表面しか見てなかったんだな」って分かったよ」

「そう」

「………」

そこで俺の口は止まってしまった。……これから俺はどうすればいいのだろうか。俺の結果はもう昨日の夜に自分で決めた。それは『死』。最終的に、生きても辛いだけなら、死んでもいいと思えた。なら、もう後は桜に殺してもらうだけだ。

「さく——」

俺が何を言おうか決めて声をかけようとした瞬間、桜は抱きついてきた

「……どうしたんだ？」

女の子に抱きつかれたというのに、心は落ち着いていた。まるで自分の知らない頭の一部でこうなることを予想していたかのようにだった

「快は……怖くないの？」

「怖い？」

「私に殺されること」

「それは……」

ここで俺はどう答えればいいのだろうか？本音を言えば怖い。今からこの体に刃物が刺さると思うと、逃げ出したくなる。……けど、逃げるわけにはいかない。ちゃんと謝りたいし、もう死ぬのは

決めたことなのだから。

結局、俺は本音を言った

「怖いよ」

「なら……なんで逃げないの？チャンスはいくらでもあったよ？」

「確かにいくらでもチャンスはあったけど……。けど、やっぱり桜には謝りたかったし、逃げて、逃げ延びても、たぶん後悔したと思う。ズルズル引きずってた気がする。」

「……そう」

桜はそれを聞くとただそう呟くと、黙った。俺もどうしていいか分からずに、黙った。

「……今なら……間に合うんだよ？」

「……死ぬ覚悟は昨日したよ」

「……そう」

本当は、桜だつて俺を殺したくないのは分かってる。……けど、もう初めの殺人をやった時点で止まらなくなったようだ。さっきから何度も逃げるチャンスを与えてる。……けど、俺は逃げるつもりはない。そしてついに、最後の時が来た。それは俺の都合に構わず、突然始まった。

「ごめんね」

桜がそう呟いた瞬間に、後ろに回っていた桜の手が離れたと思うと、鋭い痛みが走った。

「……ごめんね……！……ごめんね……！」

桜は泣きながら謝った。俺は桜の頭を撫でた。俺にとっては、確かに痛かったけど、思ったほどの痛さじゃなかったし、死ぬ覚悟はしてたので、むしろ桜が鳴いてる方が辛かった。

「気にするなつて。俺の方こそごめん。ずっと……と言っても、昨日知ったことだけど、謝りたかった」

俺はだんだんフラフラしてきながらも、そう言った。案外、すぐ

には死ねないのだと考える余裕さえあったほどだ。俺はとうとう立っていられず、前に倒れた。桜を押し倒す形になったが、桜は避けることなく倒れた。

「……ねえ。来世って信じる？」

「そうだな。……今は信じてみたいかな」

「どうして？」

「今度は桜と何事もなく、普通に友達になりたいから。桜にも幸せになってほしいから」

「……ありがと。……でも、私は来世があるなら快とは恋人になりたいかな……」

そう言ってる間にも、だんだんと瞼が重くなってきた。そこにきてようやく、自分はもう死ぬんだと実感できた。おそらく、もう喋れないと思う。だから、これが最後の言葉

「じゃあ、一緒に信じよ。2人が幸せな来世」

顔は見えないけど、たぶん桜は笑っている。俺は最後まで、意識を失うまで桜の体温を感じたまま、意識を失った。

遙か未来に望む世界

【エピソード】

「おい。あんまり怒るなつて。世の中、親の出張に子供が付いていくなんてよくあることだぞ?」

隣で父が呆れたように言っている。未だに怒ってる俺にも問題があるのだろうか、無視。別に出張自体は仕方ないと諦められるが、問題は俺がついてきていることだ。この父、あるうことが料理ができないという理由で俺を連れてきたのだ。母は母で忙しいからついていけないのは分かるが、それなら自分で料理ができるように頑張れと言いたい。それに、この引越しの件だって昨日の夜に初めて言われたことだし、謝るところか笑いながら報告するからたちが悪い一番幸いだと思っただのが春休みで、高校2年生になると同時に新しい高校に転校できることだろう。中途半端な時期よりよっぽどいい。ほら。今度の家は近くに海があるんだぞ」

確かに海があるが、そんなので喜ぶのはよくて中学生ぐらいまでだ。高校生の俺がはしゃげるわけがない。

「ふゝ。全く。誰に似たんだか、この頑固性質は。」

なんでもかんでも大雑把な父ではないことは確かだ。

「……と、待てよ。ここどこだ?」

「……… ついに地図すら読めなくなったか?」

車に付けてるカーナビを見ながら困ってる父に向かって悪態をついた。このぐらい言う権利はあつてほしい。

「ば、馬鹿なこと言うなよ。ただ行く方向が分からないだけだよ」

「それを世間では迷ったと言っただ。」

「ちつ。仕方がない。……へい!そこのねえちゃん!」

「……はい?」

田舎だからいいものの、都会でそんな声のかけ方して振り向く人などいないだろう。

「あゝ、悪いんだが、迷ったらしくてな。ちよつと道を教えてくれない？」

「はい。いいですよ」

俺は父とその女性が話している間にも、おそらく相当時間がかかると思い、寝転んだ。幸いにも荷物はそこまでないので、後ろの席にいた俺は全シートを使えた。

「それで、住所は？」

「は？え、あゝその……どこだったっけな」

どうやら父は忘れたらしい。俺はこれは時間がかかるどころか永遠に辿り着けないと思い、起き上がって後ろから顔を覗かせた。覗いて見ると、そこには『ねえちゃん』というには余りにも小柄で、中学生のようだった。髪は長く黒色でウェーブがかかっていて、腰近くまで伸びていた。容姿もよく、まさに美少女だった。……けど、なんとなく……

「？どうしたんですか？」

ジツと見つめていたからか、少女は不思議そうにそう聞いてきた「ああ。すみません。コイツ、綺麗な人見るのが初めてで」

父は笑いながら俺の頭を叩いた。

「ふふ。ありがとうございます」

少女は少し照れたように、けど、嬉しそうにそう言った。……けど、俺は何かが頭から離れない。何かは分からないけど、1つだけ聞きたいことがあった

「どこかで会ったことありますか？」

「えっ？」

頭に浮かんだけど、決して本気で聞こうと思ったわけではないセリフなのに、自然と口に出していた。少女の方は驚いたような顔で俺の方を見た。俺とこの人は会った事がない。それは確実なのに、どうしても聞きたかった

「おい、快。それはいくらなんでも古すぎるだろう。」

父はナンパとも思っただのか、呆れながらそういつてきたが、俺

としては本気の疑問だった。けど、やっぱり俺もいきなりの質問で失礼だと思ったので、「すみません」と謝った。……しかし

「ふふ。そうですね。私も……なんとなく、貴方と会ったことがある気がします」

彼女はどう取ったのかは分からないが、笑いながらそう答えた。

「それで、住所は分かりますか？」

彼女はすぐにそう聞いてきた。俺自身もこれ以上何も質問する気はないので、素直に住所を言った

「え！？じゃあ、今日お隣に引越してくる人だったんですね」

予想外にも、俺たちの家はこの人の隣だった

「あ、そうなんですか？ いや、こんな美少女がお隣さんとは、嬉しい限りだな。なあ、快。あ、俺は深峰翔で。こっちが息子の快です」

父は再び俺の頭を叩きながらそう言ってきた。正直、痛いし、隣に中学生が住んでいるからなんだというのだ。俺にロリコンの趣味はない。もしかして、この人が受験する年になったら勉強を教えろと言っのだろうか。……俺としては嫌だ。こんな意味の分からない……と言えはこの人は心外だろうけど、あまり一緒にいたくないというか、いたら自分が変になりそうな人に勉強を教えるのは嫌だ。見たことないのを見たことある人なのだから。

「ふふ。よろしくおねがいますね。私は天野桜って言います。…

…そうそう。それでも私、今年から高校2年生なんですよ」

天野さんは笑ってそう言った。そして、その名前を聞いたときにも、確かにどこかで聞いたような気がした。ずっと前、どこかでその名前を

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n7487z/>

gradge

2012年1月8日21時53分発行